

人生は功利打算以上のものであり論理理窟以上のものであるかぎり、功利打算と矛盾し論理理窟と撞着するやうな事實事象と雖も、無下に有害無益として排し去るべきものではない。彼の所謂年中行事などが是認さるべき理由根據の少くとも一つは、この點にあるではなからうか。

今や年中行事の一つとしての、而かも最終のものとしての忘年會を行ふべき時となつた。(吁またしても歳は逝くのである。)忘年會に關する専門的知識の皆無な私は、これ迄これに自己一家の意義を附與することにより、これを數多き年中行事中比較的に價値の多いものとして、悦んで自らこれを企てもし他の企にも快く賛同して來た。然らば、謂ふ所の忘年會に對する私一個の解釋とは果して如何なるものであら

うか。一言にすれば、來るべき年—新年に對する自己の希望要求を、心の合つた友人や理會と愛情とを持つた知人やと語り合ひ話し合ふことによつて精神を緊張充實させ斯くして過ぎた年—當年の失敗や蹉跌や其れに伴ふ煩悶苦痛後悔慚愧等を忘れ去らうとすることである。然り、創造改造は人生向上進歩の道程であると確信する私は、過去の成功や善行を誇りとすることは勿論、過去の失敗や不徳に囚はれ過ぎることをも排するのである。私はこの意味に於て今年も亦忘年會を排しないのである。

□

不景氣風が吹いて來た。機會や運を唯一のたのみとする人達が財界の激變に遭遇して周章てふためくのは氣の毒は氣の毒だが止むを得な

い當然事である。就中悲喜劇の主人公となつたのは大阪の女成金といはれる某鐵商である。成金々の噂が高かつた割に其の財産が至つて少かつたのは未だしものこと、最も悲慘な滑稽は其の成金に目がくらんで大切な息子を養子にやつた某華族と、養子になつた息子其のものとである。他力本願の人だちや物質萬能の人だちは、この際宜しく其の迷夢から覺むべきである。

□

私は近頃時々銀行に行くが、其の度毎に妙に寂しい氣分におそはれる。四六時中只金而も自分のものでない多額の金を取扱ふことを職業とする銀行員だちが大した不平もなささうに仕事をしてゐる所を見るといはうやうなく悲しい心持がする。彼等が生活の慰安を酒や女に求

めるのは勿論、時としては行金をごまかしたりすることすらも無理ではないとさへ思はれる時がある。

□

生活の意味と價值とを自覺して生活することが出来、仕事其のものの中に幸福を見出し得るものは、たとひ其の他にどれ程不幸なことがあつても幸福者の中に數へらるべきものである。さうだ、最大なる幸福者は仕事以外に慰安や悅樂を求める必要のないものである。

□

三人の男の子が生れ、現に二人の男の子のゐる私の家には、今年も端午の節句には貧しいながらに私の手づから選んで買ひ集めた人形が飾られた。その人形の中には數へ年二つになる三男のために新らしく

求めた「角力金太郎」があつた。而かも彼は幼な心にもそれを最も好んでゐた。「まア坊！金太郎は？」と呼ぶと、寢起でも泣いてゐる最中에서도必ずそれが飾られる床の間の方を小さい人さし指で指して微笑むのが例であつた。併し、節句は間もなく過ぎた。―仙臺から四日の夕方歸つて来て、其の夜雨を侵して買ひ求めたのであるから、楽しい節句も僅かに満一日しかなかつた。因襲に従ふことによつて我が幼子の幸福を殺ぐことは、私の忍び得ないことであつた。私は六日も七日も八日も九日も十日も依然として五月人形を飾つた儘にして置いた。やがて十一日の夜となつた。小さな佛壇には何時もの如く蠟燭の火が悲しく瞬き、線香の煙が寂しくゆらめいた。翌十二日は我が亡長男の忌日だからである。精進の食事を済してから、私共は長い間飾つて置

た五月人形を片付けることにした。死んだ子の忌日に人形を飾つて置くことは、死んだ子に對する追憶と愛惜の純真性を傷つけることを怖れたからである。かうして、三男が眠つた後で人形は柔い紙に包まれて箱の中に入れられた。

悲しき十二日の朝が來た。佛壇の灯の光も香の煙もいよ／＼悲しくいよ／＼寂しかつた。と眠から覺めた三男は床の間を見てゐたが、如何にも不思議さうなそして物足らなさうな表情をした。私はふと前夜この子の寝てゐる中に人形を片付けてしまつたことを考へると如何にも残酷なやうに思はれた。そればかりでなく、死んだ子に對する親の道を果すために生きてゐる子に對する親の道に乖くことの矛盾に思ひ及んで私はいはうやうなき羞恥と悔恨とを感じた。……間もなく「角

力金太郎」は箱の中から取り出されて再び床の間に飾られた。それを見た我が幼子は聲を出して嬉しがった。勿論小さな佛壇の灯は依然として悲しく瞬き香の煙は依然として寂しくゆらめいてゐた。

□

死者を愛する心を以て生者を愛せよ。併し死者を愛する形式を以て生者を愛する形式としてはならない。

□

時を同じくして生存する人間は十六億あるといふ。祖國を同じくするものすら七千萬あるといふ。その中で私共が直接親しく交渉するものが果してどの位あるかを考へると私はいはうやうのない寂寞を感じずる。「袖すり合ふも他生の縁」といふいひ古された言葉がこの頃しみじ

みと意味深く感じられるやうになつて來た。私は行きかふ人をも所謂「赤の他人」と思ふことが出來なくなつた。殊にこの感じが汽車―わけでも夜汽車に乗つた際に一層強く感じられる。私は長い汽車の旅が終つて下車する場合には、言葉を交した人に對しては勿論口づから「さようなら、ごきげんよろしう」といつて別れるが、たとひ一口も言葉を交さず、目さへ見合はさない人達に對してすら、心から「さようなら、ごきげんよろしう」と祈らぬ時はない。

□

妻と呼び子と呼ぶものさへ、深く考へれば畢竟運命や機會の與へたものではないか。そして妻と呼び子と呼ぶものさへ深く考へれば畢竟他人ではないか。況んや其の他の知人をや。私は到底一夜同じ汽車に

乗り合した程の深い關係ある人達を赤の他人と思ふことは出来ない。

□

世の中に罪惡が多い。併し第一義道德から見て最大罪惡といふべきものは、「おれはつまらない人間だ」と考へることである。「おれはつまらない人間だから奮發したつてつまらないし、奮發する必要もない」と考へることである。人間の最高義務は萬人皆出来るだけ立派になることだからである。自己の享有した本性を出来るだけ十分に完成して独自の自己を創造することだからである。

□

「心の欲する所に従つて矩を踰えず」の「心」を私は「意志」と解したくない。意志と解すると、私共はこの境地を以て生活の理想境とするこ

とも出来ないし、随つてこの境地に達した孔子を理想的人格と見ることも出来ないからである。私共にとつて眞に生活の理想境といひ得るものはひとり意志の欲する所に従つて矩を踰えないばかりでなく、超意志的な超意識的な乃至超自覺的な云爲行動の一切が、即ち生活全體生命のはたらき全體が矩を踰えないやうな境地でなくてはならないからである。否更に一步を進めていふと、眞の理想的人格者は、一切の云爲行動が矩を踰えないばかりか、寧ろ新らしい矩を造る——新道德新價值を創造するものでなくてはならないからである。

□

或る地方に講演にいつた際に、幹事の人達と晝食を共にした。其の中の一人在幾分酒のために機嫌がよくなつてゐたやうだつたが、給仕

に出てゐる女たちと話をしてゐる中、急に私に向つて「先生！酌婦だつて人間ですからね、さうでせう？」といつた。私は深い考もなく直ぐに「ええさうですとも酌婦だつて吾々と同様に一個の人格さ！」と答へた。と側にゐた女達は我が意を得たといふやうな面持で互に笑ひ合つた。併し私はあとから考へて見ると少し不安を感じた。私が酌婦を人格と見た心と某氏が酌婦だつて人間だと感じた心とは一致してゐるかどうかがわからないからである。表面が同一でも内實に於ては甚だしい相違があることが少くないからである。基督がマグダラのマリヤを愛した心と金持の老人が若くて美しい小間使を愛する心との間には一步千里の差があるからである。

□

大善と小善又は大悪と小悪との間の距離よりも大善と大悪との間の距離ははるかに近い。「大賢は愚の如し」とは或る意味では永遠の眞理である。

□

悪に近よらうとする人は下である。悪から遠ざからうとする人は中である。悪を超越し得る人は上である。

□

「愛」を「戦」の上位と見る私にとつては、所謂戦争や闘争は勿論自己分内の戦以外のあらゆる戦を否定するものである。私が政争といふものを排する所以も畢竟するにこの點にある。最近私は衆議院議員選挙の際にしみじみと選挙の改正の困難を感じた。何故なれば、在來乃至

今日の選挙は只勝つこと——當選のみを目的とし、そして勝つには政敵を負かす外はないばかりか、政敵を負かすに最も有効な方策は政敵を非難し政敵の名聲を傷つけ政敵の信望を破壊することだからである。かうして、私は友人の應援演説の際には主として友人が代議士として適任である所以を闡明することに力を注いで、全然競争者の非難をしなかつた。

□

また大掃除の通知が来た。一體東京の人は大掃除に對しては誠實なやうだ。大掃除の日は勿論、其の前日や前々日から熱心に掃除をするやうだ。私は勿論これに對して何等の反感をも持たない。只欲をいへば、大掃除の時の誠實をふだんに持つて貰ひたいと思ふのみである。

大掃除の時だけよそゆきな掃除の仕方をするのではなしに、いつも衛生的な生活をして欲しいと思ふのみである。當局からの注意や當局の監督の下に一年只二回大掃除をするのではなくて、自分から進んで年中清潔にするやうにして欲しいと思ふのみである。

□

一人の客が熱心に獨立自營の尊いことを説いてゐた。やがて話頭を轉じて、知名の士に自分の親類や知己や友人が多いことを誇らしげに語つた。私はこの客に對して憐愍と輕蔑とをかたみに感ぜずにはゐられなかつた。

□

率直といふことはよいことである。齒に衣着せぬといふことはよい

ことである。思想言論の自由といふことはよいことである。併し實際を見るとこれらの美德は大抵他の悪徳を同伴してゐるのは遺憾なことである。いふ所の悪徳とは他人―對者の非難である。自己批評をぬきにした他人―對者の批評である。眞に自己に忠實であり眞に他人に忠實であらんがためには、常に自分の思ふ所感ずる所欲する所を端的に率直に發表するやうにするばかりでなく、更に發表の場合や形式や方法についても周匝な用意をするやうに努めなくてはならない。

□

或る晩春の午後數へ年七つになる私の子供が門の外に立つてゐた。と十歳ばかりのどつかの男の子が何か話しかけた。間もなく其の子が大きな聲で「生意氣な！」といつたので驚いて窓から見ると拳骨を固めて

私の子を打たうとしてゐた。譯を聞いて見たら私の子が門表を指して「創造社」と讀むと教へたのに腹を立てて打たうとしたのである。

□

昧者にとつて眞理は厄介者である。悪人にとつて美德は邪魔者である。劣弱な年長者が優秀な年少者を生意氣と思つたり、これに對するに鐵拳を以てしようとしたりするのはひとり一少年のみのことではな

い。

□

初夏の一夜のことであつた。蚊が一二匹出て小さい子を螫したので、私は自分に近寄つて來た蚊を兩手でつぶした。併しそれは血を吸つてゐないばかりか、本來人に害を與へない蚊であつた。私はすまないや

うな氣持がした。

1100

私は勿論まだ萬物を心から愛するまでにはなつてゐない。けれども一木一草にも春の陽のやうに温いそして海のやうに裕い愛情を以て對した古聖の心持だけは漸く窺ひ知ることが出来るやうになつたことを喜ぶものである。

事大主義を熱烈に痛罵してゐる人があつた。因襲に囚はれることを強力呪詛してゐる人があつた。肩書を誇りとするものを反覆冷笑してゐる人があつた。私は其の「議論」には感心した。併し其の人が、依然として名のある人の下で働いてをり、依然として人の作つた且評判の

よい機關を利用し、依然として帝國大學を讚美してゐることを考へると其の「人格」を尊敬することが出来なかつた。

電車は東京市民にとつて今は一つの苦勞の種となつた。らくに乗れるなら電車ほど有りがたいものはない。賃錢の安いのはいふまでもなく、物を讀みながら乗られる點で、家族や友人などと一緒に乗られる點で、朝早くから夜晩くまで役に立つ點で。……併し今日に於ては第一項を除いた他はこれらの便宜はすべて失はれたばかりか、更に新しく害毒さへも生じて來た。曰く、時間が嘗てにならないこと、曰く健康に害があること、曰く精神上に多大の損失を蒙ること、曰く着物や履物や持物などが破損されること、……近頃ではこれらの重大な

る損失さへも我慢して、只乗れさへすればよいといふ最低限の要求しか懐かれないやうになつた。随つて乗れさへすれば大抵なことは我慢をする。併しどうしても我慢のし切れないことが時々ある。それは電車従業員——車掌や運轉手の横暴である。

車掌や運轉手の横暴は毎日目撃するところである。満員ならざる電車に満員札を下げて小さな停留場を飛ばして行くことや、まだく乗れるのを「もう乗れません」といつて發車してしまふことや、運轉手臺の方に一寸でも立つてゐると運轉手がわざと肘を張つて小突くことなどはもういふだけ野暮だ。勿論私は激職にある車掌や運轉手諸君に對して衷心同情をしてゐる。時に依つては形に現はして感謝したいと思ふことさへある。それだけ彼等が自分の職責を忘れて横暴な振舞をし

たり冷酷な言辭を弄したりすると憤慨せずにはゐられない。少くとももつと明らかな責任感ともつと温い親切心とを以て従業して欲しいと思はずにはゐられない。

□

或る五月半のぼか／＼と暖い日のことであつた。私が九段下で満員電車に乗り換へて車掌の前に立つと、彼を私は手でグツト押した。そしてかういつた。——「さうくつつかれるとあつくつてしようがない！」これを聞いた私はこの無自覺で横着な車掌に對して憐愍と憤懣とをかたみに感ぜずにはゐられなかつた。

或る夕方、而かも雨がぼつり／＼と降り出した時のことであつた。さなきだに混雜してゐる電車の混雜のしようといつたら形容を絶して

ゐる程であつた。私の乗つてゐる電車も勿論満員以上であつた。そして到るところの停留所には険しい眼で電車を白眼んでゐる客が山のやうに立つてゐた。と私の乗つてゐる電車が神保町に停つた。そして二人下車した。多勢の中から紳士が二人乗つた。ところが運轉手臺に立つてゐた補助車掌が二人目の客の乗車を拒んだ。客は二人下りたんだから二人乗れる筈だといつて臺から下りなかつた。併し車掌はどうしても諾かないで最後には殆ど突き下すやうにして發車した。と其の車掌は「馬鹿！」と叫んで運轉手と顔を見合せ「あのつら！如何に電車に乗りたからつて〇〇のやうな面をしなかつたつてよからうに！」といつて二人とも冷笑つた。勿論其の罵聲は下車した客には聞えなかつたが、同じ客であり、そして一臺違へば同様の運命に遭ふべき今乗つたばかりの客にも私にも聞えた。それを知らずに平氣でゐる車掌や運轉手の後姿を見ると、私は腹が立つどころか只々いはうやうのない悲しさで寂しさを感ずるのみであつた。

□

役者の修養や心がけや生活の中には吾々の摸範とすべきものが少くない。併し私の到底忍び得ないことが一つある。それは彼等が襲名とか改名とかいふことを重大視することである。これは彼等が因襲的懐古的精神と形式觀とに囚はれてゐることの證據だからである。藝術家の生活は創造的でなくてはならないし、生活を創造的にするがためには進取的求新的であり、形式よりも實質を主とすべきものだからである。

□
 ラッセルの『社會改造の原理』は私の期待を裏切つた。世間が推稱し且私も最も期待した「創造本能論」が餘りに簡單粗雑な常識論に過ぎなかつたからである。併し私は其のためにこの書の著者を蔑視はしない。寧ろ私はこの著を通してラッセルが生きた人間心理又は生きた人間生活の理會者であることを知り得たことを幸福に思ふものである。もつと具體的にいふとこの書及びこの書の著者としてのラッセルが私に最も深い感興を與へた點は戀愛・性・性的生活等に關するかなりに徹底した研究を提供したことである。

□
 或る日私は晝食を認めるために小さなレストーランに這入つて、隅

の方の空席に腰を下した。私の前には五六人の筋肉労働者(らしい)人達が赤い顔をしてしきりに酒—或るものは日本酒或るものはビールを呑みながらメートルを擧げてゐた。やがて私の料理が出来た頃に勘定を命じた。總計六圓いくらといふ給士女の聲が聞えた。私は彼等が筋肉労働者であることと今は晝であることと、更に最近不景氣風が吹いてゐることとを思ひ合せていやな氣持をせずにはゐられなかつた。

□
 或る時私は御馳走の招待狀—葉書を受け取つた。見ると其の日付に誤謬があつた。明何日といふのが、「明」と「何日」との間に一日の相違があつた。私は行くか行かないかについて容易に決心がつかなかつたが、それは只御馳走になるといふだけの意味ではなくて行つて慰むべ

き筋のものであつたので承諾の返事を出した。やがて翌日になつた。併し、困つたことには日付が正確でないが、「明」日に當る其の日は日曜であつたのと、「何日」の下に括弧をしてゐる曜日の名が(日)と讀めたので、私は日付の方を誤りと斷定して、指定の時刻に間に合ふやうに仕度をして出掛けた。やがて招待された人の家に着いて案内を乞ふと主人が不在であることを告げられた。私は曖昧なことをいつて辭した。私は自分のうちに歸つてまでも對手を責めようとする心と對手を宥さうとする心が戦つてゐるのを感じた。——勿論其の翌日(正しい招待日)は行かなかつた。

□

或る官立の女學校に友人をたづねたら、其の應接室に參觀人心得と

いふものがあつた。それは十幾條かから成つてゐるものであるが、殆ど全部「〇〇すべし」といふやうな命令的禁止的のものであつた。私は見てはならないものを見たやうないやな感じがするのをどうすることも出来なかつた。

□

足駄の齒を入れ換へさしたら齒入屋が「がむし」に傷をつけたために間もなく齒が割れて仕舞つた。數日後にその齒入屋が來たので又入れかへさした。そして「がむし」の傷のことを言はしたら、正直に自分が傷をつけたことを詫びて齒入賃を幾分か割引して行つた。其れから二度はいたらこんどは全く役に立たない程「がむし」が割れて仕舞つた。それでも私はこの齒入屋を憎む氣にはなれなかつた。

「日和」といふ履物は極めて重寶なものだが下品な感じの悪いものである。これは單に日和を履くものが多くは商人や町人だといふ聯想から來る感じかも知れないが、私から見ると、足駄とも下駄ともつかない中途半端な、妥協的な、不徹底な履物だといふ自覺から來る感じのやうである。結局日和は重寶だから下品に思はれるのである。

□

東京市内の有名な一私立高等女學校では、時局に鑑みるところがあるとかの理由で、晝食の際には副食物を食べないことにしたとのことであるが、最近これ程私を驚かした教育問題はない。この一大英斷を試みた當事者の胸中には種々の理由があるであらうが、私から見れば、

これ程馬鹿げた、少くともこれ程本末を顛倒したことはない。

勿論、これを表面から見れば、斯くの如き矯激な方法も一種の德育手段としての價値はある。併しながら、斯くの如き極端な手段を試みて其れの十分な効果ををさめようとするには、其れに先んじて生徒の精神的訓育が十分に行はれてゐなくてはならない。即ち、生徒をして斯くの如き極端な方法が德育乃至修養としての當然にして有效なる一手段であると自悟自證せしむるに足るだけの心の準備が十分に整へられてゐなくてはならない。然るに、これに反して、この心の準備を整へることなしに突然斯くの如き極端な方法を強むる時には、單に生徒をして強烈な反感を懐かしめるか、若くは道德的虚偽を行はしめるに過ぎないのである。斯くの如き私の推測にして不幸にも過がなかつた

ならば、恐らくは、同校生徒の凡てが、必ずこの企に對して甚だしい不満を懷いてゐるであらう。そして、實に斯くの如き極端な非常識的な方法が生徒の精神に満足を與へる筈は斷じてあり得ない。(蓋し、どんな貧乏人でも文字通に何等の副食物もなしに飯を食べるものはあるまい!) 恐らく同校の少女達は、學校から歸るや否や、晝食に副食物を取らなかつたことを口實として菓子や果物や夕食の際の御馳走などを母姉に要めるであらう。甚だしきは、かたばかりの學校用無菜晝辨當で教師の目を欺き、歸宅してから本當の晝食を取るものさへもあるであらう。若しもこれに反して、中流以上の家庭に育つた生徒中、斯くの如き方法を衷心歡ぶが如き言動をするものがありとすれば、それこそ恐ろしき虚偽である。

私は勿論、この種の企をすべて非難するものではない。殊に今日のやうな時勢に於ては、種々の非常手段も必要である。併しながら、少くとも中等以上の學校に於ける德育は、心より形、精神より方法に及ばなくてはならないと共に、苟くも普通教育に於ける德育は、一般的陶冶を主眼としなくてはならない。私が無菜晝食的德育法を排する所以も、畢竟するにこの方法が、私の上に述べた德育觀と矛盾するがために外ならない。

□

或る銀行に行つた時のことであつた。受付専門の老人が私の先客の差出した預金帳か何かを受取ると受付の仕事以外の仕事らしいものをしてゐて中々私の出したものを受けつけて呉れない。そして私の後に

は三四人も客がたまつてゐて、私同様いら／＼した目付で受付の老人の仕事を見つめてゐた。と其の後にゐた一人の行員が其の老人に「そんなことをしなくともよいからお客様の方を！」といった。老人は一瞬暗い顔をして仕掛けた仕事を其の行員に渡して私だちの出したものを受け付けた。と、私は自分の心がいつの間にか不快から憐愍に變つてゐるのを見出した。——私はこの老人の生涯を想像したからである。恐らくこの老人も若い時には相當に働きのある銀行員であつたのが、老齡のために受付といふやうなつまらない仕事をして糊口の資を得るやうになつたのであらう。それだから時には受付以外の仕事をして見たいのだらうと想つたからである。

□

「年寄の冷水」といふことばがあるが、年寄の冷水は必ずしも嗤ふべきことばかりでもない。

□

伊太利から飛行機が來た。世界一の軍艦陸奥が進水した。何れも人氣をあふつた。これらについて歡喜するはよい。併し、飛行機や軍艦が何に用ゐられたものであり又何に用ゐらるべきものであるかを少しも考へることなしに只歡呼し只欣喜するのは決して稱すべきことではなからう。

□

「ぬすつと氣のない人間はない」といふ。本當かも知れない。電車や汽車でよく只乗をして車掌に發見されるものがある。最近某府知事が

汽車の只乗をして問題を醸したが随分體裁の悪い話ではないか。併しこんなことはひとりこの人に限つたことではないらしい。

或る日のこと、私が須田町で運轉手臺の方から江戸川行に乗り換へると引きちがひに一人の男が下りた。と、車掌がチン／＼と發車の會圖をした。けれども運轉手は發車しないで鐵棒につかまりながら首をさしのべて後の方を見てゐた。其れも一刹那、大きな聲で怒鳴り立てた。「あい！二人で一枚の切符ぢアいけないぢアないか?!」そしていきなり飛び下りた。私はまだ入口に立つてゐたので外を見ると四十を越した相當の仕度の男と美しく着飾つた十五六の娘とが運轉手と車掌とから口ぎたなく罵倒されてゐた。やがて其の男はもう一枚の切符を渡した。二人連でありながら娘を後方から下し自分だけ切符を渡して

前から下りたらしかつた。やがて運轉手が發車すると執念くも振り返つた。「馬鹿野郎！五錢ばかりごまがしやがつて娘に氣まりが悪くないか!!!」と怒鳴つた。——これを聞く私は車掌の惡口を憎むよりも、その男を憎むよりも、未だ浮世を知らぬ少女が、親の不心得のために大きな恥辱を蒙つてどれ程悲しくどれ程恥しかつたかといふことと、その男が僅かの過失のために一生自分の娘に頭が上らなくなつたこととを思ふといはふやうなく心が暗くなるのであつた。

□

長い間子供の遊び場に委ねてゐるかなり廣い場所が私の近所にある。或る日例の如く私が子供を連れて散歩に出かけた。人の少い方で子供に電車や自動車を見せさせてゐると、十四五の娘が私たちの側に

来ていきなり小さなシャベルで土を掘り始めた。そして瞬く間に紙袋に一ぱいつめると丁寧に風呂敷に包んで急いで坂をかけ下りた。僅かの土くれ、殆ど誰のものともいへない土くれ！それをその娘が持つて行くのに如何にも物をぬすんで行くかの如き振舞をしてゐるのを私は意味深く思はずにはゐられなかつた。

□ 「獨を慎め」といふ言葉と「天を怖れよ」といふ言葉とは結局同じ事を別な方面から言つたものである。——前者は倫理的であり後者は宗教的である。

□ 「哲學を勉強すると孤獨になりますね」と私にたづねた人があつた。

それに對して私はかう答へた。「さうです。はじめは孤獨を感じます。併し研究が深くなるに従つて普遍的永遠的といふ感じが強くなります。勿論どこまで進んでも孤獨の感が全然消滅するといふことがないかも知れませんが。そしてこの孤獨感とそれに伴ふ寂莫悲哀とから脱離しようとするのが信仰や宗教かと思ひます。」

□ 私は宗教を無下に排斥するものではない。只私は利己心の満足を主眼とするやうな似而非宗教を排するのみである。感謝よりも恩寵を主とし、精進よりも救済を尊ぶやうな宗教を排するのみである。

□ 安價なる同情を罪惡視する點に於て私はニイチエと同様である。私

はこの心で人にも同情しないと共に人からも同情されようとは思つてゐない。

或る日のことであつた。私と同縣人とかいふ男が肺病で自活が出来ないから應分の補助を頼むといふ趣意の手紙を自ら持参して合力を乞ひに來た。私はふと三年前に同一の男が同様の手段で合力を乞ひに來たことを想ひ出したので分厘も與へずに斷つてしまつた。

□

人間が如何に利己的なものであるかの例を私は屢々肺病患者に見出すことがある。自分が難病に苦しんでゐるのだから、自分と同じ病氣で他人を苦しめたくはないと思ひさうなものだが、事實はさうではなくて、平氣で他人と杯を交したり、他人に咳を吹きかけたり、多勢の人

人中で唾を吐いたりしてゐる。

□

肉體的と精神的とを問はず、致命症を負ひながら尙自暴自棄にも陥らずに最後の刹那まで自己の最善を盡し自己の生命をいづくしむばかりか、更に他人の幸福をさへも祈るといふことは恐らく聖者にしてのみはじめて可能なことであらうが、少くとも要求理想としては如何なる凡人もこの境地を實現することを心掛けなくてはならない。

□

何時死んでもよいだけの十分な準備をすると共に何時になつても死にたくないといふ無限の欲望を懷いてゐる人にも眞生活の門戸が開かれる。あらゆる刹那に於て自己の最善を盡すと共に生きてゐるかぎ

り爲さねばならぬ又なし得る独自の使命を荷つてゐる人のみ眞生活を生活することが出来る。

□

私は少年時代には非常に死をおそれた。風邪にかゝる度に自分が死んだ夢を見た。近頃は死をおそれないやうになつた。否、死をおそれなくなつたのではなくて死に就いてあまり考へないやうになつたのである。ふとしたことで死に想ひ及ぶと其れをおそれることは勿論少年時代などには比べもならない程強く深いものである。少年時代の死の恐怖は單に感覺的のものであつたのに、今日のそれは倫理的のものである。

□

生命を愛し慈しむことは容易に以て實は酷だ困難なことである。刹那の快樂や幸福のために生命を傷つけて平氣であることが如何に多いことよ。これはひとり肉體的生命に關したことばかりではない。

□

刹那に永遠を見出し得るといふことは少くとも眞人の一資格である。

□

子供を連れて近所の廣場に散歩に出かけた。多勢の散歩者の中には十二三の女の子と小さな犬とを連れだ夫婦連があつた。と、どこからともなく見るからに恐ろしげな大きな犬がやつて來て其の小さな犬に近づいた。私ははらくしながら見てゐると小犬の方はワン／＼吠え

ながら大きな犬に飛びついた。すると大きな方は逃げ出した。かと思ふと又直ぐ近寄つてあべこべに小犬に飛びついた。こんなことが幾度となく繰り返された。これを見てゐる中に私の心から恐怖の念が一掃されて仕舞つた。私は自分の子と角力を取るやうな氣分で飽かず眺めてゐた。犬といふものは出つくあしさをすれば喧嘩をするものと思つてゐた私にとつて、この光景は思ひまうけぬ幸福の種であつた。——犬にすら見ず知らずの小犬を我が子の如く愛する心もあれば、見ず知らずの大きな犬に我が親の如くに親しむ心もあるといふことは、我が子の幸福のために殆ど日課の如く我が子と一緒に散歩に出かける私に強い深い感銘を與へない筈はなかつた。

]

狂犬がまた出たと新聞に記されてある。私は狂犬其のものをおそれずればにくみもする。けれども狂犬があるために犬全體をおそれにくむことが出来ないばかりか寧ろ却つて其れがために犬を愛する念が一層強くなる。發狂の可能性があるのは眞剣と誠實と熱情とがある證據だからである。この意味で、私は狂人に對しては何時も深い同情と一味の敬意とを持つものである。少くとも私は白痴や罪人は勿論凡人に對するよりも狂者に對する方が多くの親しみを感じるのである。

□

平凡人の如何に多いことよ。健康者の如何に多いことよ。單調無味の生活の如何に多いことよ。

□

銜氣は私の忌むところである。就中奇を銜ふことは私の最も忌むところである。奇は常凡と異なる點に於て既に不自然の感じがするのであるから、其れを銜ふといふことになれば二重の意味で不自然になるからである。

□

日本の國民生活には改造すべき部分が山程ある。大きな問題は姑く措くとして、卑近な日常生活だけに就いて見ても、缺陷が非常に多い。而かも日本人の日常生活は自覺的生活ではなくて本能的——因襲的惰性的生活であるから、これを改造するのは案外に困難である。文字通に根本的改造が必要である。中でも私の常に遺憾と思つてゐることは、日本は家族主義の國だといひながら、一般人は他人の家族生活は勿論

自分の家族生活の幸福を維持し増進しようとする誠意を缺いてゐる點である。たとへば一例を訪問にとつて見る。——

日本には訪問日もなければ訪問時間もなければ訪問に必要な一定の手續もない。訪問者の勝手な時に訪問する。時によると朝早くでも夜晩くでも食事時でも勝手に訪問する。これは訪問する方には都合がよいかも知れないがされる方には迷惑至極である。これから出かけようとか、仕事をしようとか、讀書をしようとかいふやうな時(特に早朝)に客に來られると其の一日が滅茶々々になる。そして大抵な場合訪問される方には利益が少いのであるからたまらない。それでゐて、日本の習慣は來客には茶菓を出し食事時には食事さへ出さなくてはならない。目上の人や親友ででもあれば、食事半ばにして應接しなければ無

禮になる。殊に田舎などでは一人の來客に對して家内總がかりで應接しなければならぬ。若し面會謝絶でもすれば必ず非難されたり怨まれたりする。で止むなく居留守をつかふといふやうな不徳義を敢てしなければならぬこととなる。さうしたくないと思へば、役所とか商會とか學校とかいふやうな勤め先で面會をするやうになる。併し、これでは家庭生活を傷ふことは免れるが公務を忽せにすることになるから結局同じである。それから一面識もないものに訪問されると暫くの間はどんな人間かわからないので不快な感じて應接をしなければならぬ。時とするとかつばらひに茶菓を嚮應するといふやうな馬鹿げたことにさへなる。何とかしてこの弊風は一刻も速に改めたいものである。併しこれは少數の人の力では到底不可能なことである。といつて

何時までもこの種の害毒に甘んじてはゐられないから私は略次のやうな心掛でこの問題に對してゐる。

紹介のない新來の客には取次に用事を聞かした上で遇ふ。夜分や讀書執筆食事の最中又は家族に病人がある時には客に遇はないことを本旨としてゐる。但し、公共的な用事のためであれば大抵な時には會ふやうにしてゐる。餘程親しい人かさうでなければ恩を着てゐる人以外には酒食は出さない。(酒食の嚮應をする必要のある人はなるべく料理屋で嚮應するやうに心掛けてゐる。)多忙中に面會する人に對しては豫め多忙なことを斷つて理會を得てから招ずるやうにしてゐる。水曜の午後と日曜の午前とを面會日として置く。それから他を訪問する場合には日曜の午後又平日ならば午後三四時頃(先輩や初めての人に對し

ては面會時間を豫め問ひ合して置く。面會時間は
大抵三十分以内長くとも一時間を越えないやうに注意してゐる。訪問
先が多忙であつたり病人があつたりした場合には玄關で用をたすやう
にしてゐる。……

□

旅行などをして見ても日本の生活には缺陷が多いといふことが痛切
に感じられる。——汽車が混み合ふなどといふことは姑く別問題とし
て、宿屋の設備の不完全には一番閉口する。第一に不用心である。唐
紙や障子一重のかけにはどんなものが泊つてゐるかわからない。外出
をする際でも寝る際でも用心の仕様がなない。最も困るのは風呂に入る
時である。紙入や貴重品の置き場所がない。湯治場などでは殊にこの

不便を感じる。そのために何時もつまらない心配をしてゐなくてはな
らない。最もいやな悪習慣は茶代祝儀である。宿屋に就いて改造した
い點はいろいろあるが、何よりも先に改造したいのはこの二點である。

□

「旅の恥はかきすて」といふ言葉がある。いやな言葉である。この言
葉とこの言葉の現はす事實とに日本人の弱點が最も明白に示されてゐ
るからである。自宅にゐれば餘程嚴肅な人でも旅宿では平氣でどたら
姿でゐる點にも日本人の弱點が語られてゐる。

□

人間の生地は最も疎い人に對する場合と最も親しい人に對する場合
とに於て殆ど同等に現はれるものである。だからこの中間にある人に

對する時の有様即ち社會生活公生活等を見て人間を評價することは甚だ危険なことである。事實、社會では立派な人間として萬民の稱讚や尊敬の的となつてゐる人が家庭では暴君であつたり、旅に出て大失態を演じたりすることが少くないのである。

□

飲酒は勿論善行爲ではない。といつて酒を飲まない人が凡て善人だとはきまつてゐない。中には酒を飲むと罪惡を犯すおそれがあるから飲まないといふやうな人もあり、性來酒がさらひで一滴も飲めないためや貧乏で飲めないために飲まないといふやうな人もあり、酒を飲んだために多くの失敗をしたことに懲りたために飲まないといふやうな人もあるからである。若し酒を飲まないが故に尊敬すべき人があると

したならば、酒は性來好きであり、酒を飲むだけのかねがあり、酒を飲んで失敗したことが一度もないし又失敗する可能性も少ない人でありながら、酒によつて快樂や幸福を購ふ必要のない程不斷の生活が緊張充實し、高尚な快樂と幸福とにひたつてゐるために飲まないといふやうな人である。——併しこんな人は恐らくゐないであらう。

□

存在は價值である。苟くも透徹した心眼で見る限り如何なる存在と雖も其れ自身の特色を持たないものはない。——私は、或る初夏の一日目前の中空に如何にも輕快に如何にも幸福さうにして飛んでゐる數匹の蠅を見て、この舊い信念に對して今更らしく新らしい感激を加へた。

夕刊の講談「堀部安兵衛」で淺野内匠頭刃傷の所を讀んで思はずも私は梶川の同情なき抱き止めに憤慨した。が間もなく梶川が淺野侯を抱き止めたからこそ義士の仇討といふ大事件が起つたことに想ひ及ぶと、私の梶川に對する憎惡感に意義ある一味の感興が加はるのを感じずにはゐられなかつた。

□

趣味は或る意味では人である。趣味の高低は或る意味では人格の高低である。そして趣味は人格と同様に半ば先天的であり半ば後天的であるが何れかといへばより多く先天的である。高い教養がありながら趣味の低いものがあるのはこれがためである。併し、趣味は結局或る

意味に於てのみ人である。趣味の高低が即ち人格の高低ではない。趣味に淫するものが多くは浮世ばなれをするのはこれがためである。この意味で、私は高い趣味を持つ人は好きだが趣味の人——通人や茶人は嫌ひである。曾呂利新左工門といふやうな人間が嫌ひなものもこれのためである。

□

私は生花は好きだが茶は嫌ひだ。笛や尺八や鼓や琴やピアノは好きだが太鼓やオルガンは嫌ひだ。さつぱりした日本料理でゆつくり小杯を傾けることは好きだが天ブラや西洋料理やで急いでビールの大杯をあふることは嫌ひだ。立派な羽織や外套を着てゐながら粗末で穢い襦袢などを着てゐるものよりも羽織や外套が幾分粗末でも奇麗な襦袢

を着てゐる人が一層好ましい。前齒に金の入齒をしてゐる人、銀時計に金鎖をつけてゐる人、立派な帽子を冠つて穢い下駄を履いてゐる人、門構が身分以上立派な人、手紙の状袋に自分の姓名をゴム印で押す人、日本の状袋の封緘に横文字を書く人、新らしい着物を人中もかまはず時々自分で眺める人、人前で化粧を仕直す女、巻煙草を吸ふ女、和装でオペラバッグを下げた女、お客に來ると間もなく便所に行く女、おしろひを塗ることを化粧の第一義と思つてゐる女、髻を思ひ切つて短く刈つた男、瓜を長く伸ばしてゐる者、きたない足袋を穿いてゐるもの、雪駄履きの男、素顔の女形俳優、……これらは私のさらひなものである。食へもので嫌ひなものはうどとめうが。

□

今日の私にとつて娛樂といふものは殆どないといつてもよい程である。先づ好きな本をゆつくり讀んでゐられれば大抵不足を感じない。酒は少々好きだが毎日必ず飲まなければならぬといふ程ではない。大抵一合も飲めば二三分間いい氣持で子供の相手をし、それから例ものほり本を讀んだり仕事をしたりすることが出来る。自宅で二合飲むといふことは一月に一度か二度しかない。酒に酔つて直ぐ寝てしまふといふやうなことは恐らく一年に一度あるかなしだ。外の宴會から歸つて來て酒を飲むといふことは殆ど絶対にない。それから私は歸宅の遅くなる心配のある宴會に出かける時には必ず家族にはやく寝るやうにいつて置く。——夫や父が宴會に出てうまいものを食べたり遅くまで馬鹿騒ぎをしてゐたりするのに妻子がお茶漬をかきこんで午前

の一時までも二時までも寝ないで待つといふことはひとごとでも我慢が出来ない。

□

芝居が今日の私にとつて唯一の娯樂かも知れない。併し芝居には幾分目の肥えてゐる私はよい芝居でないと氣に入らない。ところでよい芝居だと中々金がかゝる。金は我慢するとして時間の長いには一番困る。四時間以上を娯樂に費すことは多忙な私の忍び得るところではない。殊に最近面白い芝居が少い。あれば精々一日に一幕位なものだ。斯うして私は最近芝居に行くことが稀になり行くとしても精々一幕見位に過ぎない。

□

初夏の一夕、子供が妻の親類のF君からお土産に貰つたハーモニカを出鱈目に鳴らしたら、西洋劇の前曲プレリュードらしい音が出たので急に松井須磨子の『サロメ』を想ひ出した。彼女が生きてゐる中は兎角の反感も持つたが、彼女の女の死後殆ど西洋劇らしい西洋劇が見られないことを自覺して、私は妙に寂しい感に打たれた。

□

人間の眞價は棺を蔽うて定まるといふが、たしかに眞理である。死後に惜まれ慕はれるものでなければ價値ある人間ではない。死後時を経るに従つて益々光を發揮するものでなければ眞に價値ある人間ではない。苟くも生き甲斐のある生活を生きようとするものは本當に知己を千歳に待つだけの大抱負大信念を持たなくてはならない。

□

氣に入つたおもちやの少いことは苟くも小さい子を持つた親だちの誰しも不満とするところであらう。で、私はやむなくつまらないおもちやを與へるよりも寧ろ普通の什器や雑誌を與へるやうにしてゐる。ところが、或る時嘗て私の大きな子の守をしてゐた娘が二人の人形が鐵棒遊びとブランコとをしてゐるおもちやをお土産に持つて來て呉れた。それは其の精巧な點でも丈夫な點でもおもちやとして申分のないものであつた。殊に鐵棒遊びの紙人形の運動の微妙さといつたら生きてゐるかと思はれる程であつた。で、時としては私さへ其のおもちやにねぢをかけて暫らく微妙な運動に見とれてゐることもあつた。——一年の日子が過ぎた。それでもそのおもちやは未だ完全であつた。と

ところが或る時數へ年二歳の子が其の紙人形の頭も手も軀幹もむしり取つて足ばかりにしてゐた。併し、人形はねぢをかけると足だけで運動をしてゐた。私はこれを見るといはうやうのない悲しみに打たれた。恰も知合の少年が汽車に轢かれてもしたかのやうに感じられるのであつた。

□

「スタイル・イズ・パーソナリティー」といふことは或る意味に於て眞理である。そしてこの際の「スタイル」は單に「文體」に限らなくて「字體」にも當て嵌めることが出来るやうである。たしかに文體も字體も人格の特色を現はすものである。時とすると字體の方が一層雄辯に一層確實に人格の特色を物語る場合がある。——理窟はぬきにして、

私は男であまりに字がうまい(殊にきれいな)人はきらひだ。何となく軽薄らしく思はれるからである。

□

声色音調話容にも人間の特色がかなり顯著に現はれるものである。否精密に観察すると一舉一動一言一行は勿論、目の色にも鼻の形にも人間の特色が現はれるものである。——私は僅々五六寸四方の面積しかない顔が世界に只の一つでも同じものがないことに今更らしく驚くと共にさもあるべきことだと思ふことが多い。

□

迷信を排する點では私は人後に落ちないつもりである。併し、世の識者が迷信と見るものにも少くとも一顧に値するだけの道理があると

思ふものである。大宇宙が大實在が生命であるかぎり、異常なことが起る前には必ず何等かの豫兆があり随つて敏感な若しくは注意深い者には何等かの豫感があるべき筈である。私はこの意味で、出がけに下駄の緒が切れたり其の他朝や仕事のはじめやに不吉なことがあるやうな場合には、勿論其れで勇氣を挫いたり仕事を中止したりはしないが、いつもよりも深く戒心注意するやうにだけはする。

□

或る時乗りつけの車屋に上野までの車を頼んだ。ところが来るやうに頼んだ時間に來て呉れなかつたので再三使に催促させた。それでも未だ來ないので私は別な車に乗つて行かうかと思つて戸口を出ると漸くやつて來た。「大さうおそかつたね」といふと返辭のかはりに「上野

は何時發です」とたづねた。「〇時〇十分發だ」と私が答へると「それぢアそんなにお急ぎになることアありません。未だ四十分ありますから」といつた。勿論發車には間に合ふやうに車は到着した。併し若しおくれたらどうする？ 否たとひおくれなくとも發車前十分では漸く間に合ふ程度である。そして單に發車に間に合ふためになら恐らく大抵本人は車に乗らないであらう。——私は汽車に乗つてからまでも車夫の心掛に對して不満を感じてゐた。

□

生活改善同盟會の催した六月十日の「時」の記念日は最近に於けるこの種の企畫中たしかに意義あるもの、一つである。蓋し、日本人は一體にして時の觀念が稀薄であり、時の價値を十分に理會してゐない

ために、個人生活に於ても團體生活に於ても少からざる損失を蒙つてゐるからである。只私がこの企畫に對してひそかに憂懼してゐるのは、其の効果が案外に少くはないかといふことである。單に宣傳ピラを蒔くとか、時計を合させるとか、正午十二時を期して一齊に汽笛や寺鐘を鳴らさすとかいふことは、家々の時計を正確な時計に合さすといふことには効果があるであらうが、時間を尊重させ時間の觀念を明白にさせるといふ點には大した効果がないではないかといふことを懸念するものである。この點に關しては教育博物館で試みた「時の展覽會」の如きはかなり有効な試みである。それは兎に角として、今日の我が國民はたしかに時に關する多年の陋習を打破すべき時である。「時は金」といふ古い諺の上に、ベルグソンなどのいふ「時は生命」とい

ふ新らしい見方で時に對するやうにすべき時である。そしてそれがためには、ひとり教育家とか社會改良家とかいふだけではなくて、心ある國民全體が相協力しなくてはならない。殊にこの意義ある企をした同盟會の人達の中にさへ其の夜の晩餐會に遅刻するものが多かつたといふやうでは、よほどしつかりした覺悟がなければ「時」に關する陋習惡風を改善することはむづかしい。

□

時に關する數多い陋習惡慣の中一日も一刻も速に改善して欲しいことは、不時の訪問客の長座、圖書館で貸出書を搜出すに長い時間を要すること、會合の時間の懸値等である。

□

時の紀念日に俳優で時計好きの阪東彦三郎が活躍したのは面白い。

——嘗て彦三郎の兄の六代目菊五郎が五代目の得意とした或る芝居を上演した時、其の千秋樂の日の打出しが二時間もはやかつたので、先代から尾上家に仕へてゐる自分の番頭か弟子かをつかまへて、自慢氣にこのことを話すと、其の番頭か弟子かは感心するかと思ひの外、至つて眞面目なそして幾分苦い顔でかう囁いた。「先代は初日も樂日も時間には少しも違ひがなかつた」と。若しもこの噂が本當であるとしたら五代目菊五郎は流石に名人である。何故なら本當に稽古を積んでをり、そして毎日同様の熱心と同様の用意とで演る芝居であるなら、初日だから時間が長くかかり、樂日だから二時間もはやく打ち出すといふやうな筈がないからである。

青年時代の私は時間を惜んだ點では、もつと精密にいふなら、時間を出來るだけ多く讀書に用ゐた點では、恐らく何人にも劣らないと確信してゐる。道を歩きながら、電車に乗りながら、食事をしながら、床に就いてから本を讀むのは勿論、便所の中でさへも本を讀んだ。最も極端なのは芝居や宴會でさへ本を讀んだ。そしてこれはその當時の私にとつてはたしかに必要な適當な有效なことであつた。併し、今日の私は必ずしもこれ程時——讀書時間を惜んではゐない。勿論私は暇がある毎に本を讀む。正直にいへば出來るだけ多くの讀書時間を得たいと思ふことは青年時代と聊かも異なる。只今日に於ては、讀書が即ち生活だと思はないのは勿論、讀書が即ち思想生活學究生活だとす

ら思はないだけである。讀むことも必要だが考へることが一層必要だと思ひ、道を歩きながらや電車の中や床の上に寝轉びながらや便所の中や芝居の中や宴會の中やでは本當に役に立つやうな讀書が出來ないと思ふために讀むよりは寧ろ考へることを主とするのみである。一時に二事を爲すよりも一事に専心した方が自己にとつて一層忠實であると思ふのみである。斯うして私は、食事をする時には出來るだけ楽しく有効に食事をするやうに努めるのである。殊に酒宴や觀劇や其の他の娛樂のために時間を費す場合には、豫め朝早く起きるなり休息時間を節するなりして、いつもするだけの讀書なり仕事なりをした後にとりかゝるやうに努めてゐる。忙がしい用事や大切な讀書のことを心配しながら、娛樂のために時間を費す位心苦しいそして無意義なことは

ないからである。だから私は人にさそはれて遊びに出かけるといふことは殆どない程である。

□
時を軽視するものは下である。時を尊重しながら時に囚はれるものは中である。時を尊重しながら時を超越するものは上である。

□
朝夙く起きるといふことをよいことと思ふのは人情である。朝夙く起きることは衛生的には勿論精神的にもよいことである。併し朝おそく起きることを直ちに悪事であると思つてはならない。夜おそくまで勉強をしたり仕事をしたりした結果朝起がおそいといふことがあるからである。それから、晝寝をするといふことをわるいことと思ふのも

人情である。併しこれは晩起をわるいことと思ふよりも一層間違つた考である。少くとも讀書や思索を仕事とするものにとつて或る程度の晝寝は極めて必要有效なことだからである。

□
眠ければ時間をかまはずに眠れ。疲れたならば時間をかまはずに休め。そのかはり気分がよく元氣のある時には全力を傾注して仕事に當れ。時間を尊ぶといふことは自分の精力を尊ぶといふことである。時間を浪費しないといふことは自分の精力を浪費しないといふことである。——世には如何に形式的な時間尊重者の多いことよ、本當の時間浪費者の多いことよ。

意義ある生活を生きようとするものは長生をすることに努めると共に刹那々々を充實させるやうにしないで、朝に道を聴けば夕に死すとも可なり」といふことの意味を本當に體得し且この言葉の意味を實現しようと努めてゐる人の長生にしてはじめて尊敬するに足る。——世には如何に豚のやうな長生者の多いことよ。

□

或る雑誌が「百年後の日本」といふ題で感想を募つて來た。私はこれを一見して興味ある問題と思つたが、次の刹那には極めて困難な問題と思つた。そして更に次の刹那には愚劣な問題と思つた。斯うして私はこの間に答へる興味を失つてしまつた。やがて一ヶ月許の後机上の信書を整理するとこの問題を記した往復ハガキが目についた。私は

暫らくの間デットとそれを見つめてゐると、何時の間にか考へてゐたものと見えてゐる／＼の感想が次々に浮んで來たので、私はペンを取つて次のやうな答解を認めた。

明日のことを的確に豫見することさへ中々困難な私にとつて百年後を豫見することは殆ど絶対に不可能なことでありますが、ほんの思ひ付を記して責ふさぎとします。

(一)領土はずつと擴大し、帝都は西にうつります。(二)日米同盟日露同盟が成立します。(三)米國へは飛行器械利用の船舶を利用して五日間で達することが出來ます。(四)外國留學生を出すことが全然無くなり、倒に南米、亞弗利加、印度、バルカン邊よりどし／＼留學生が來ます。(五)日本は世界有数の工業國となり、醫學地震學の本場とな

ります。(六)丸髻をいふ婦人は全然見られなくなります。(七)華族制度は全廢されます。(八)避妊者獨身者が非常に増加します。(九)教師醫者は大半女が占めます。(十)相撲興行はなくなります。(十一)富士山を中心として一大公園が出来ます。(十一)義務教育制は亡くなり、普通選舉は實施され、植民大臣勞働大臣が内閣で有力な地位を占めます。(十二)國字はローマ字になります。(十三)家族制度は全然面目を改めます。(十四)軍人は外出する時には劔を下げないやうになります。(十五)女博士がどつさり出ます。(十六)パンを常食とするもの甚だ多くなります。(十七)今日生きてゐる人間は全部死んでしまひます

□ 空想を排するはよい。併し、すべての空想がすべての人間にとって

有害なものではない。子供にとって、詩人にとって、發明家にとって、藝術家にとって、哲學者にとって、宗教家にとって、空想は生活の重要部分である。否、常人にあつても、全然空想のない生活は面白味も深みもそして成長も創造もない生活である。

□

人格は或る意味に於ては、即ち他から見れば力である。そして人格の力は内からのみ湧いて来る。内的充實の、内的醗酵の、内的緊張の、感激の、愛の泉からのみ湧いて来る。だから人を動かさうとするものは先づ自ら動かなくてはならない。他より尊ばれようとするものは先づ自ら尊ばなくてはならない。但し、自ら動くといふことは單に手足を動かすといふことではない。自ら尊ぶといふことは傲慢になるとい

ふことではなし。

二五六

夏になつた。電気の下で仕事をしてゐると、いろ／＼な蛾や小蟲などが電燈のまはりを飛び廻つたり机の上に落ちたり書物の上を匍つたりする。それを見てゐると私はいはうやうのない悲しさと深い感謝の感とをかたみに味はうものである。——朝に生れて夕に死するはかなき彼等の生涯に對して悲しみを感ずると共に人間と生れた自分の幸運を感謝するのである。この感じはひとり蟲を見た時のみ起るのではなくて、數年間毎日同じ時刻に門前を通るあさりむきみ屋や豆屋やとぎ屋等のふれ聲を聞く時にも起る感じである。

長い間一人の年老つた花屋が私の門前を通つてゐた。大さう愛嬌がよくて何時も「きれいにこしらへました」とか「おもらひ申します」とかと人の氣に入るやうな挨拶をするかはりよい花は持つてゐなかつた。この花屋が暫らくの間來なくなつた。その時は殊に流感が旺んな時であつたし、その花屋の年が年なので恐らく死んだんだらうなどと噂してゐた。やがて半年も立つと又ひよつこり現はれて「花い！花い！」とふれて歩いた。私だち—私は欣ばしいやうなそれでゐてだまされたやうな複雑な感じに打たれた。

政治家や軍人の人格や生活などには反感を懷かせられることが多し。只彼等に尊敬すべきは常人に比べて氣が若く心身が壯健なことで

ある。常人が隠居時と思つてゐる六十歳位を老齡とも何とも思つてゐないことである。併し七十近くの老將軍が赤い色の帽子や金ピカな軍服を着てゐるのを見るとかなり複雑な感じがする。

□

大學總長の俸給は中將程度だといふ新聞記事を土臺とした一口噺に次のやうなのがあつた。——「大學總長が中將と同じ待遇ではよい學者は得られない筈だ」と甲がいふと、乙が「中將が大學總長と同じ待遇ではよい軍人は得られない筈だ」といつた。これを見て私は何れも一理ある觀察だと思つた。

□

私の寓居から三軒目の或る宅に連夜十一時頃電報が來た。そのうちは

門から戸口までかなりに遠いのに加へて早寢のうちなので、一度や二度ぐらゐ呼んでも中々埒があかず、やがてドン／＼と門を叩いて「○さん！電報！」と連呼する。するとそのうちの飼犬をはじめ近所の犬が吠え出すといふ有様なので、晩寢の私どもは兎に角近所の迷惑は並大抵ではなからうとひそかに心配してゐた。併し時には寢付いたばかりの所をそのうちの電報のために呼び起されるやうなことも一度二度ならずあるやうになつたので、遂に私共まで憤慨してこんなことさへいふやうになつた。「○○さんで打つ電報ではないから晩く來るのは止むを得ないとしても、あのやうに殆ど毎晩來るばかりか時間さへ同じなら、あんなにたたき起されないやうに用心するのが近所への徳義だ。それがいやなら打電者も恐らくさまつてゐるだらうからもつと

早く打つやうに注意したらよさうなものだ。」やがて二度續けて私の所に電報が來た。その一度が十一時頃であつたので發信時間を檢べて見たら普通の時間より三時間も遅れて着いたことがわかつた。それでもう一通の方を檢べて見るとやはり同じやうに三時間餘遲着してゐることが判つた。と私は非常に強い懺愧を感じた。事實の真相も正さずみだりに罪もない他人をうらみそしつたことを心から恥ぢずにはゐられなかつた。

□

人を見そこねることも人を買ひかぶることも恥である。併し、私は人を見そこねる方が人を買ひかぶるよりも一層恥づべきことだと思つてゐる。これと反對に、人から買ひかぶられる方が人から見そこねられるよりも一層恥づべきことだと思つてゐる。

□

「出来るだけ人の長所を見よ。そして出来るだけ自己の長所をかくせ。」これが私の一つの箴言である。而かも一見實行し易いやうで實は中々困難な箴言である。

□

生後まだ一個年半にもならない私の三男がこの頃お茶碗や湯呑やその他のおもちゃを重ねることに少からぬ興味を感じるやうになつた。殊に茶碗や湯呑やの上に箸を載せることには最も深い興味を感じるらしく、それがうまく成功すると小さな兩手を妙なおどりの手振のやうな具合に振り動かしながらにこ／＼笑つてゐる。或る夜、お茶の時に

またこの藝當をやつて悦に入つてゐた。僅な家族が彼を中心として笑ひ興じてゐた。そして色々な小道具が食卓の上に載せられた。それに従つて子供の希望も益々大きくなり、出来るだけ多くのものを載せようとしたが中々成功しないので、私共が手傳つてやつた。けれども彼は少しも喜ばず、ガラ／＼とくづして又自分で試み、數回の試錯の後に漸く成功して、例の如く如何にも嬉しさうに両手を動かした。私共は顔を見合せ且深く理解のない似而非愛情を恥ぢた。

□

停車場が殺風景なのはたしかに國民生活の一缺陷である。長途旅行の際などに何等の趣味も雅致もないゴミ／＼したゴタ／＼した停車場に十分も十五分も待たされるのは洵に閉口する。山中の停車場はこの

點では都會地の停車場にまさること萬々である。大宮から高崎までの停車場は何時通つても感じのよいところばかりである。其の清潔な點に於て又其の雅致に富む點に於て。私は或る春の日に、この線を通つたが、沿線一たいに櫻が咲いてゐたために一層趣深く思はれた。熊谷堤の櫻は既に盛りが過ぎてはゐたが流石に名所と呼ばれるだけの値打がある。少々頭の疲れた私はぼんやり櫻に見惚れてゐると一人の女料理屋の女中らしい身なりも容貌も卑しげな女が乗り込んで來て私の向側に座つた。やがて汽車が動き出して暫らくすると、件の女は左の袂に手を入れて二合壺を取り出し、すばやく栓を抜いて口に當てラツパ呑みに一口仰つて乗客をジロリと見渡した大膽さ圖々しさには只々喫驚する他には術がなく、乗客は何れも云ひ合したやうに目を見交し

た。而かも女は平氣な顔で、數度只さへ天を仰ぎつつある鼻の穴を上に向け、やがて少しばかり残つてゐる壺の酒を一瞥したかと思ふと又これを口に當てて一滴も残さずに飲み盡し、壺を勢よく窓外に抛り投げ、小さな懷鏡を出してまづい顔をうつし穢い襟をかき合せたかと思ふと立ち上つて、折から停車した深谷驛のプラットフォームに勢よく下車した。乗客は復び微笑を帶んだ目を交してこの女に對する複雑な感想を無言で語り合つた。併し私の心は到底笑ふことが出来なかつた。吁淪落の女！吁厚顏無恥の女！人を人とも思はぬ彼女も、少くも一度は他人の一瞥に遭ふや倏ち顔に紅葉を散らすやうな純真無垢な時期があつたであらうと思ふと、彼女に對する私の憎惡と侮蔑とは憐愍と同情とに變ぜざるを得なかつた。

□

仙臺市から朝汽車に乗つた時であつた。辨當を買つたが茶がなかつた。發車間近に牛乳が來た。僅かなことであるが客にとつては不便なことである。

その列車が二十分も遅れた。乗客には其の理由がわからない。こんなことは時々ある。否これは汽車だけのことではなくて電車にも随分多い。大抵の場合車掌や運轉手には其の理由が判つてゐる筈だが乗客がたづねなければ其の理由を話さない。これは決して褒むべきことではない。

□

私は人から頼まれたことは出来るだけしてやらうと思つてゐる。併

し頼まれてすることは決して本當の善ではない。頼まれないことを進んでやるのが本當の善である。而かもまた頼まれないことを進んでやるといふのは必ずしも本當の善ではない。頼まれずにやるのが頼まれてやることのやうにびたりと對手の要求に合ふと共に對手の獨立心もほこりも傷つけないのはいふまでもなく、その本當の幸福を増進することが出来るやうであつてこそ本當の善といふことが出来る。併し、これは實際には中々容易なことではない。

□

善惡を問はず、頼まれたことは必ず肯き入れるといふ俠客道は、單純であり形式的であり極端ではあるが、「善惡の彼岸」に本當の善があるといふ點から見れば、少くとも其の男性的な點が氣持よいことである。

□

私は學校は郷里の尋常高等小學校と早稻田大學とを終つただけだから、世間の人たちに比べて割合に學校教育のことは知らない。若しも學校教育が價值の多いものであれば、私はそれだけ他の人たちよりも不幸な譯であるし、これに反して學校教育が有害なものであれば、私はそれだけ他の人たちよりも幸福な譯である。正直な處、私は學校教育は有難いものと思つてゐる。負惜みをいふ時は別であるが、本心ではやはり人並に中學校高等大學を経て最高の教育を受けたいと思つてゐる。併し事實上私は中等教育は少しも受けてゐないが、大した不足も感じしゐない。勿論中等教育を受けたならば、高等教育を受ける際に、語學について苦しみはしなくてもよかつたらうし、又もつと科學

や數學などの素養を獲るために専門の學問をするには一層好都合であつたらうと思ふが、これと共に、私がひそかに誇りとしてゐる自學自習の習慣は恐らく今日程獲られなかつたらうと思ふ。さうして見れば、學校教育——少くとも中等教育を受けると受けないとは私にとつて大した損得がないといつてもよい。否、何れかといへば正直の所私にとつて受けない方が利得であつたやうにさへ思はれる。

如何にも、私は田舎から出て早稻田に入つた許りの時には單に「田舎もの」といふことの外に中等教育を受けない「獨學者」といふ點で少からず臆してゐた。事實私は中學校を経て來た人々から見れば、學生としての缺點を少からず持つてゐた。私は勿論英語殊に會話と書取とが全く出來ないといふ程であつた。ノートも奇麗に取ることが出來

なかつた。理科數學方面の知識も少かつた。勿論、ベースボールのマツチのことなどは少しも知らなかつた。併し、私には「負けず魂」があつた。好學心があつた。獨學自習の習慣があつた。教科書だけで又は教師の講義だけでは満足しないで自ら研べられるだけ研べて見るといふ讀書慾があつた。専門の學科をどこまでも深く修めて行くといふ研究心があつた。休日でも祭日でもまたはどんな僅かな時間でも勉強に利用するといふ時間を惜む心があつた。斯くして私は學校の正科を大抵満足に修めた外に、誰よりも多くの特殊研究にも出たし、更に四年の間に二つの文檢にも合格した。私が學校だけで満足しないでいろいろ自分で研究したのはたしかに長い間の獨學のたまものである。私は四年の間いつも同級生などのんきに呆れてゐた。僅な教科書——

それをさへしつかり読みもせず——やよい加減な聴き學問や雑誌學問位で得意らしい口をきいてゐるのを見聞すると、齒が浮くやうに思はれる時も決して少くはなかつた。原書を読む——それも碌には讀めない癖に——といふことだけに重きを置いて、何を讀むか如何に讀むかについては少しも懸念してゐないし随つて又何等自分の意見が確定してゐないらしい人達を見ると、私は語學こそ出來ないが田舎で教師などをしながら、落ちついてしつかり讀書をしてゐる人の方がずつとえらいものゝやうに思はれることさへないでもなかつた。多くの學生たちを見て、私の一番不満足に思つたのは、自ら進んで研究しようとする精神が少いことであつた。教科書でさへ、教はつた所だけはどうかゝうか試験に間に合ふ程度に勉強はするが、教はらない所はたとひ

僅か五頁や十頁残つてゐても、それを自分で讀んで仕舞ふ人が少かつた。

勿論、長い間學校教育を受けた人は、學生としての常識が發達してゐる。知能性格共に基本的・一般的調和的な陶冶を得てゐる。それから興味が多方的であり、自尊心に富み、志望が遠大で凡てお、う、よ、うに生ひ立つてゐるから、將來發達の可能性に富み、更に、正しい價值評價の標準を持ち、萬事に對して少くとも大體だけは見當違ひはしないといふ長所がある。そしてそれは非常に値打のあることである。併し、それだけではいけないのに、單にそれだけの人が多い。獨學者はこの點が學校教育を受けた人より劣つてゐるが、一科の學に精しく確かだといふ長所を持つてゐる。だから學校教育を受けながら、獨學者の長所

を利用すれば鬼に金棒である。

私は早稻田時代にはこの心組で勉強した。一般科目には大した力を注がないで、特殊研究に重きを置いた。殊に倫理學や倫理學史や哲學史や教育學史といふやうな科目は自分が檢定を受けるために研べたのに比べると餘りに簡單で低級であつたから、原書を教科書にするものゝ外は、大抵教室の後の方に居て、別な本などを讀んでゐた。教育學や教育史などは後からは缺席がちであつた。

で私から見ると専門教育には選擇科目が多い程よいと思ふ。それと共に、優秀な若い教師が多く居て「演習」をしつかりやつて呉れるのがよいと思ふ。學校にゐる中に出来るだけ難解な、少く共専門々々の代表作を、たとひ全部でなくともよいから主要な部分を精讀さすやうな

組織にして欲しいものである。

單に専門學校だけでなく、各種の學校に亘つて、何事でも正確に理解し、深く考へ、自ら研究するといふ性情を養つて欲しいものである。其れよりも先に個人々々の特長——創造性に對する自覺を持たしめそしてそれを助長させるといふ風にありたい。一言にすれば一般性の教育と共に個性の教育を併せ兼ねるといふことを主眼にして欲しい。これは我が國學校教育の全體に通ずる根本的病弊であると思ふ。専門教育ですらも「自ら研究させる」——自學といふことを甚だしく蔑視してノート本位にしてゐるのは返すくも遺憾なことである。

尙これに因んで一言したいことは、自學の機關を完備して欲しいといふことである。單に研究室といふやうなものだけでなく、生徒が學

修したものを鍛錬し活用して確實に自己のものとする機關——會合とか發表機關とかいふもの——を完備して欲しいといふことである。そしてこれは中等學校以上の學校全部に對しての希望である。最後に、在學中たとひ完全なものでなくともよいから、何等か人生に對する理解と信念——人生觀を持たしめるやうにして欲しいものである。單に學術の方のみに全力を注いで人物や精神の陶冶を蔑視するといふこともたしかに今日の中等教育以上殊に高等教育に於ける一大缺陷である。

中等教育についていひたいことは澤山あるが、自分で經驗したことがないから、茲には全くいはないこととする。

私は、小學校は、尋常科は自分の村の學校、高等科は隣り町の學校を終つた。

私は小學校時代には幸福であつた。尋常科に入る時には、學校のSといふ先生（先生が何人ゐたか記憶してゐない）が村の人で父と酒の上の近付であつたので、私が未だ學齡未滿なものかまはず、數へ年六歳の時に入學させて呉れた。そして計數器の「球數へ」が出来たので毎日のやうに蜜柑の形をした花菓子を貰つてうちに歸つた。家では夙くから父親が算盤の稽古をして呉れた。割算などはかなりに上手に出来た。

この頃の學校は亂脈で、先生が教場に出たり出なかつたりすることが多かつた。私たちは時とすると補習科の生徒から教はることが多かつた。そしてその人たちは大抵竹の鞭を持つてゐて、「やかましくするとぶんなぐるぞ」などと嚇かすので先生よりも恐ろしかつた。一年

生の時に女の子と同じ机に並べられたのを子供心にも恥しいこと、思つてゐたのが今でも記憶に残つてゐる。生徒の學齡も不揃であつた。私より五つも年の多いのがゐて、その席が教場の一番後ろなので、試験の時などには字引などをかくして用ゐてゐた。私はその男のために三年間首席になることが出来なかつた。

體操といふものが面白いものだといふことを覺えたのは二年生の時であつた。佐藤といふ先生がドイツ式の行進法を教へて呉れた。或る時行進中に、私が口に手を當て、ラツパの眞似をしたのが、先生に聞えて、「誰だ！」と怒鳴られたが、私は其の怒鳴りやうが激しかつたので、どうしても「私です」といふことが出来なかつた。私が小學校時代に犯した罪惡の意識の第一がこれであつた。も少し先生がやさしく

いつて呉れたら正直に白狀するものをと今もその當時と同じ心持でくやんでゐる。尋常三年頃から夜學に通つた。村の人で漢文や歴史物など讀める人の所に習ひにもいつた。そして随分むづかしいものを覺えたので、學校で習ふものがつまらなく感じられることが少くなかつた。草双紙や講談は非常に好きで、湯をもらひに行く度毎に其の家人に讀んで聞かした。正月の小使錢は大抵講談本の代になつてしまつた。

尋常小學校を卒業する際に首席になり、そして縣賞を貰つたことは子供心にも自信力と自尊心とを強める上に少からぬ効果があつたことは疑ひない。それから直ぐ隣町の高等科に入つたが、町の人と私達在のものとの區別が強く、つまらぬやうな子供から、只在から來たといふだけで馬鹿にされたのは反抗心と奮發心とを強める上に大きな効果

があつた。高等一年の時の學校教師が時間がやかましくて、遅刻すると必ず「起立」の罰を科されるので半里も離れた所から通ひ殊に毎朝いろ／＼な用達をして行く私にとつて最も大きな悲しみであり心配であつた。怠惰のために遅刻するのと、働いて遅刻するのとの區別の判らない先生がうらめしかつた。この年に兄か同じ學校の雇をしてゐたら、私の先生が私の作文の出來がよいといつてゐたといふことを聞かされてかなりの感激を覺えた。高等二年に上つたばかりの時に、受持の先生から聞いた、其の年高等科を卒業して中學校に入學した人の入學試験の成績が優等なことが少からず私の奮發心をそゝつた。高等三年に上る時に始めて二等賞に下つたのが非常に口惜しかつた。その年に補助教師をした人が、何かの發明の話を聞かして呉れたことも感動

が深かつた。この年に受持の教師が町から出た生徒に對して自宅教授をするといふことゝ依估最負があるといふことゝが少からず私の徳性を傷つけた。この頃から私は、私の個性を自覺し始めた。私は算術や圖畫や地理や理科などの成績が他のものよりも悪いことゝ、そのために首席になれな。ことゝを自覺し始めた。それ許りでなく、家が貧乏なために他の人が中學などに入る準備をしてゐるのに私はそんなことを夢にも見ることが出來ないといふことを少からず悲觀するやうになつて來た。紀元節の時に學校の總代となつて校長の前に出て「謹んで紀元節を賀し奉る」といふ祝詞を述べた時に聲が低い上に早口であつたことが、非常に恥しくて其の後暫らくは小さい胸がそのことで一ぱいになつてゐた。作文などは大抵四年と同一題であつたが、材料に制

限を附して、これまでは三年、この後は四年といつて區別をつけるのが習であつた。私にはそれが無意味なものに感じられた。何故なら、四年の作ることが私にもやすくと作れてあつたからである。こればかりでなく、大抵なことは四年と一所に居ても左程負けさうもないやうに感じられて、かなり窮屈な、齒がゆい感じがするのであつた。高等二年の時から生徒長となり、交代に當番日誌を書くやうになつたが、自分の當番毎に何とかして一風變つたものをもと思つて苦心したことは今でも忘れられない。

高等四年になつた頃圖畫の成績が思ひ切つて悪いのには私ながらつくづくと情なかつた。私たちは三四年合級であつたが、一つ下の三年級に劣等生でおまけに足が悪く、學科の中でも作文が一番ひどいもの

があつたが、受持の教師がそれをおもちや扱ひにして、優等生の文とその男のとをいつも比べて讀んで聞かすのが非常に私の心持を悪くした。凡ての點で私はこの先生が有りがたくはなかつた。同じ年の半頃に三年に他校から轉學して來たものがあつたが、これに對する生徒たちの態度が輕蔑的な冷淡なものであつたのも憤慨の種であつた。卒業間近に受持の教師が他に轉じたので、補缺ばかりで授業を受けたが、其の先生がたが皆准教員であつたために随分いやな日を送つた。八年間の結末をつけるべき尊い時期に思想感情が破壊されることが譬へ様なく悲しかつた。只試験に依估がないことは私ばかりでなく大部分のものゝ喜であつた。

□

私は學校を出てからもはや滿八年を費した。八年の日子は必ずしも長いとはいへないが必ずしも亦短いともいへない。少くとも私の一身上から見れば、或は生涯中最も複雑な、最も變化のはげしい、随つて最も意味の深い期間であるかも知れない。

先づ、これを外的方面に就いて見るに、第一に私は、早稻田大學を卒業すると直ちに結婚した。結婚は、私にとつては、それが數年に亘るかなり迂餘曲折した戀愛生活の歸結であるといふ點から見れば、其他の人―戀愛の歸結でない結婚をする人よりも大事件ではない。併し、結婚は私にとつてすら流石に一大事件であつた。

第二に、私は職業を持つ身となつた。早稻田に入學する前に滿七年に近い間職業―教職に従つてゐた私にとつてはこれ亦はじめて職業に

就く人にとつての如く大事件ではない。併し、私の興へられた職業は私の學校生活外の職業とかはなりにかけ離れたものである點に於て、それが私の生涯に與へた影響は必ずしも少くはなく、随つて其れの意義も亦必ずしも淺くはなかつた。殊に私は短い間二度丈人に備はれる職業に就いたが、其の他は殆ど職業ともいひ得ないやうな職業―著述に従つてゐたといふことも私の人格乃至生活の發達に對して特殊の影響を與へてゐる。殊に、小規模ながら自分の手一つで―殆ど全く獨立で雜誌を經營したとは私から見ればかなり意味の深いことである。

第三に、私は三人の子を生んだ。結婚して子を生むといふことは、一般的抽象的には殆ど問題にもならない平凡事である。併し、特殊的具象的には、即ち、私にとつては、少くとも愛といふことを重大視し、

親子の關係といふことに特殊の意義を見出してゐる私にとつては、三人の子を生んで父となつたといふことは、かなり意味深いことである。殊に私は其の中の一人——長男を喪つてゐる。吁我が愛兒の死！これこそこの八年間、否恐らく私の一生涯に於ける大事中の大事であるかも知れない。

第四に、私は大小數度の病氣をした。殊に學校を出て漸く半月ばかり職業に就くと間もなくかなりひどい病氣——肋膜炎にかかつた。尤も私は一體孱弱なからだったのでそれまでも幾度も病氣はしたが、この時の病氣は一ばん長く且一ばん危険の多いものであつた。それだけ私にとつては意味深いものであつた。この八年間にひとり私のみが病氣をしただけでなく、亡くなつた長男は勿論、次男も三男も病

氣をした。殊に次男は生れるとから病弱で、二三年間は殆んど藥餌に親んでゐた程である。この他準家族にも病人があつた。守と世話をした娘とが相ついでかなりひどい呼吸器病を煩つた。かうして病氣も恐らくは人並よりも強い影響を私の人格と生活とに與へたことと思ふ。

第五に、私は幾分旅行をした。上京前は縣外に足を踏み出したことはたつた一度——而かもそれは隣縣の福島縣（私は山形縣の人間である）へ——しかなかつた。上京後も銚子・鎌倉・江の島・日光・横濱及び神奈川縣の名所を見たに過ぎない。それが學校を出ると、山梨縣——甲府を振り出しに（山梨縣へは續けて五年行つた）北は青森縣から西は香川縣まで、青森・岩手・宮城・山形・福島・茨城・千葉・栃木・群馬・埼玉・山梨・長野・神奈川・静岡・愛知・岐阜・滋賀・三重・奈良・京都・大阪・兵庫・岡山・

香川の諸府縣に或は一回乃至數回の旅行を試みた。而かも其の大半が講演のためであり、且數日間の滞在であるだけ、私にとつては決して無意義な經驗ではない。

第六に、私は少くとも數の上では相當の著述をした。大正元年十二月に處女作『若き教育者の自覺と告白』を公にしてから二十七部書いてゐる。質に於ては兎に角、量に於ては將來は到底これだけの割合で書くことは出来まいと思つてゐる。随つてこれまた私にはこの八年の生活を短い無意義なものと思はれない一つの理由根據である。

次に、これを内的方面に就いて見るに、上に述べた私の外的生活の變化は或る意味では直ちに私の内的生活の變化であつた。否嚴密な見地から見れば、私の内的生活の變化のはげしさは到度外的生活などの

比べにもならない程である。

第一に、私の内生活は其の形式に於て變化を生じた。注入より思索に、思索より表現に向つた。讀むことを第一義としたものが考へることを第一義とするやうになり、更に考へたことを表現することを第一義とするやうになつて來た。私が著述又は執筆に生活の大部分をささげるに到つたのはこれがためである。

第二に、私の内的生活は複雑になつて來た。これは外的生活が複雑になることに伴ふ必然の結果であるから特別の意義を有するものではないが、長い間凡ての意味で單調な生活をして來た私にとつては相當に意義ある變化である。結婚や子を持つたことは、かくれてゐた私の性の要求と愛情とを目ざました。職業は私に俗知俗識——社會的知

識を興へた。文筆生活は私の人格をも生活をも凡ての意味で文藝化した。旅行は私の自然に對する鑑賞の目を開いて呉れた。……

第三に、私の内的生活は其の内容に於て幾度も大きな變化を閲した。而かも其の變化はかなりに激烈なものであつた。時としては根本的破壊にも近い變化さへあつた。私は幾度も私の行くべき途に迷つた。私は幾度も新らしい試みをして失敗した。併し、幸にして最近漸く私は私の人格の本質自我の特色を略正確に理會することが出来、随つて私の指すべき方向も略明かになつた。私は漸く人間としての自覺を獲たやうである。

こんな點から考へると、學校卒業後の八年間は少くとも私一個にとつては無意義なものではなかつた。嚴密にいへば、生活の一本本特色が

プロセスがエントであるところ及び無限の發達進歩といふことに存するかぎり、如何なる時と雖も單なる修養期間とか準備の段階とかいふものはないが、大まかな便宜的な見方に依れば、やはり修養準備を主とする期間と仕上事業を主とする期間とに別つことは必ずしも不當とすることは出来ない。そしてこの見方に依ればこれまでの三十餘年間の私の生活は廣い意味で修養準備の期間であつた。更にこれを細かに別れば、第一期は小學校卒業までの期間であり、第二期は上京までの期間であり、第三期は學校卒業までの期間であり、等四期は學校卒業後より今日に至るまでの期間である。

かういつたからといつて私は修養準備の期間が文字通に過ぎたといふのではない。要は文字通の修養準備の期間が最早過ぎたといふので

ある。修養即事業準備即實行といふ生活の本道（眞生活ではない）に漸く第一步を踏み入れたといふのである。随つて私はこれから或る期間所謂仕事——金を取る仕事をしないで専心讀書生活或は文字通に學生生活をするところがあるかも知れない。併し其れは所謂修養準備のためではなくて直ちに仕上げを意味するものである。

孔子は「三十而立」といつた。私は立つことに於ては略古聖の要求に近づいてゐる。けれども問題は今後の私の生活内容——業績の如何にある。私は、三十餘年の準備生活を経て來た私は、抑もこれから如何なる方向を指さうとするであらうか。私は何を自己の生活の目的とし、何を自己の使命とし、且如何なる方法手段によつて件の目的乃至使命を果さうとするであらうか。

□

私の目的理想は一言にすれば「人らしい人になりたい」といふことにある。一個完全な人格者になりたいといふことにある。いふ所の意味は、圭角のない所謂圓滿な人格者になりたいといふのではない。霞を食つて生きてゐるやうな俗ばなれした所謂崇高な人格者になりたいといふのではない。本具の性能中最も卓越した部分を出來るだけ完全に發達させ出來るだけ有効に活用することによつて個性の鮮かな人間になると共に何人も爲し遂げ得ない仕事を中心目的としながら、本具の性能中第二義第三義のものでも決して無下に抑壓したり絶滅したりはしないで、上に述べた中心目的を達するに妨げない限りに於て出來るだけ完全に發達させ出來るだけ有効に活用したいといふ

のである。独自の個性の所有者と独自の業績の遂行者となることによつて自己を理想化永遠化普遍化することを中心目的としながら、それと直接には関係のない性能をも相當な程度で重大視することによつて人格と生活とから現實味と人間味とを失はないやうにしたいと思ふのである。一層具體的にいへば、讀書思索執筆著作講演等に主力を注ぎながら口腹や性の欲求を充たすこと、美を味はふこと、妻や子や家族や知人などの幸福の増進をはかることのためにも相當の力をつくしたいと思ふのである。學者思想家として卓越したものになると共に一個の「人間」として、父として、夫として、主として、友として、團體や社會の一員としても一人前以上なものになりたいと思ふものである。

この理會と要求と信念とは、既に述べたやうに、私の過去三十年の

努力によつて贏ち得たものであるが、最も自覺的な随つて最も直接的な影響を與へたものはニイチエとイブセンとベルグソンとゲーテとである。即ちニイチエとイブセンとベルグソンとは主として私に独自の個性の所有者となり卓越した業績の遂行者となることを教へ、ゲーテは私に人間らしい人間になることを教へた。この意味に於て、私は、これらの諸家に衷心感謝の意を表するものである。

繰り返していふ。私の中心目的は獨自にして優秀な個人格となると共に獨自にして卓越した業績の遂行者になることである。併し、これだけでは甚だ抽象的であつて、私の目的を十分に明かにすることは出來ないから、もう少し具體的に述べて見よう。

私には非常に多くの短所がある。長所といつても客觀的にはとるに

足らぬもののみであるが、少くとも自分から見れば長所と思はれるものが二つある。論理的に考へる力と、考へを發表する力とである。随つて、私の目的もこの二つの長所を活用することにある。事實、私は前者に恰適する目的として學問の研究殊に論理的思索を主とする哲學の研究を選び、後者に恰適するものとして筆を取ることと話をすることとを選んだ。而かも私は過去七年間従事した職業と自分の近親の職業及び十數年間の豫備的修養とから制約されて哲學と教育とを調和し所謂「教育哲學」の建設——研究を以て學究生活の中心目的とするこゝたになつた。かういつたからとて、私は教育哲學以外のものを研究しないといふのではない。要は教育哲學を中心として哲學を研究したいとするのみである。幸にして最近この目的達成の可能性を見出した。

そして、私から見れば、この事業は、私が生涯を捧げても悔いるところのない世界的事業だと信ずる。勿論私の努力は、この事業に對して漸く荆棘を切り開いただけの役目を果し得るに過ぎないであらう。而かもそれだけでも私は瞑することが出来るのである。何故なれば、この事業は全く新しい事業であるばかりでなく、私の性能と境遇とに恰適したものだからである。私はこの事業に力をつくし且この事業を或る程度まで成し遂げることによつてのみ、獨自（にして優秀）な人格の所有者となることが出来ると共に獨自（にして卓越した）業績の遂行者となることが出来るのである。言ひ換へれば、生き甲斐のある生活を生きたることも人間としての責任を果すことも出来るのである。

本來私は文章も辯舌もまづかつた。どちらかといへば辯舌の方は文

章よりも少くとも好きであつた。併し、一體にして小心で臆病な私はしやべることが好きでも演説は上達しなかつた。文章ははじめは美文が好きで論文がさらひであつたし、事實また拙手でもあつた。併し、長い間の境遇は、私をして書くことにもしやべることにも多くの機會を與へ随つて何時の間にか人並の程度には達することが出来るやうになつた。否、單にそればかりでなく、私は益々この性能を發達させて自己實現の手段にしようと思ふやうにさへなつたのである。

かういふ理由から、私は第一に學者として相當の成果ををさめたいと思ひ、第二に筆によつて、もつと具體的にいへば雑誌を發行して自分の意見を發表し、第三に言論辯舌に依つて社會に貢獻したいと思つてゐる。勿論第一のものが私の主力のそそぎところである。

併し、これが私の希望の全體ではない。私はこの他に實行上の希望を持つてゐる。それは自分で自分の理想に近い教育をして見たいといふことである、自分の教育觀を事實化して見たいといふことである。そしてそれがためには勿論學校を建てて自ら經營し自ら教育する他には途がない。併し、これは私の教育觀が内外の教育學界及び教育實際界から認められるのはいふまでもなく、私の思想も人格も一層十分に（本當の意味で）教育化された後でなければ企てようとは思つてゐない。私は教育の改造の必要を痛感する點に於ては恐らく何人にも劣らないであらうと思つてゐる。そして、自ら實地教育の改造に當つたならば相當の効果を擧げ得るとも思つてゐるが、而かも私は、日頃實力も經驗もなく、随つて尊敬すべき信念も理想もなしに、名を研究に藉

りて目的であるべき子供の教育を材料や手段とするやうな教育者の輕薄な不誠實な心事態度を甚だしく不滿に思つてゐる程であるから、到底今日のやうな貧弱な力では自ら實地教育に當ることは出來ない。何れ、私はその中都合がツイたら、外國にでも行つて數年間専心教育の研究をつゞけると共に、各種各方面の特色ある實地教育の狀況を視察し、更に自分の子供を教育した上で、前に述べたやうに、價值ある教育上の見解がまとまつた時にはじめて實地教育に従事して見ようと思ふ。正直のところ、今日の私にとつて最も強い興味を感じさせるものは學問の研究である。時勢の大激動につれて私が實行上特にきは立つた活動をしなないのはこれがためである。私もこの大改造期に際しては人並に男らしい熱血が湧く。併しそれと共に私の理性はつめたく澄んで

ゐる。そして理性の力はしばし熱血を抑えてゐる。やがてはこの冷い理性が熱を帯んで來る時があるであらう。この熱が理性と快く抱擁して私の小さな弱い人格も何等かの光を發する時があるであらう。本來私は熱い血に動かされ易い人間である。一旦熱すれば利害得失をさへ忘れ勝ちな人間である。私はこの種の熱を自らおそれてゐる。私にとつても國家社會人類にとつても必要な熱はもつと底光りのする熱、白熱でなくてはならない。今の私はいはばこの白熱力を貯へてゐるやうなものである。本當の生活はこれからである。

私は過去八年間の自己の生活を回顧すると漸愧と悔悟とに堪へない程である。過去の私は結局馬鹿であり意氣地なしであつた。未だ自己も知らず世間をも人生をも知らなかつた。一度は自己を知らないため

に餘りに自己を信じ過ぎた。一度は世間を知らないために餘りに他人を信じ過ぎた。そして其の結果は勿論失敗である。自己を買ひ冠つたがために傲慢になり排他になり随つて他人の助力を得ることが出来なかつた。他人を買ひ冠つたがために依他的になり随つて自己の最善を盡すことが出来なくなつた。斯くして私は自己に對しても他人に對しても懷疑的になつた。殊に他人に對する信頼の念は甚だしく薄弱になつた。勿論私とても全然他人の力を蔑視するわけでもない。直接に社會公共のためになることをしようといふ場合には出来るだけ他人の力を藉り、出来るだけ他人の力を利用しようとする。併し、私一個のためには出来るだけ他人を煩はしたくないと思つてゐる。煩はさうとしてもそれは大抵な場合不可能であると共にたとひ可能であるとして

もそれは大抵な場合自己にとつても他人にとつても不徳義なことだからである。人間は結局利己的なものである。そればかりでなく、大抵な長者は若いものを心から愛し得るものではない。教師でさへも自分の生徒が卓越した人物になることを心から喜んではゐない。況して生徒が卓越した人物になるやうな骨折を進んでしようなどとは思つてゐない。勿論人によつては心から若いものや生徒などのえらくなることを喜んだり、進んでえらくなるやうな世話をして呉れたりするものもないではないが、大抵の人は頼まれて仕方がないから世話をするに過ぎない。少くとも私はこの八年の間幾度もこの種の事實を経験もし目撃もした。私の依頼したことの大抵は必ずしも身分不相應なことではなかつたにも係らず、殆ど凡てが目的を達し得なかつた。そして幾度

の叩門幾度の低頭幾度の歎願に依つて贏ち得たところのものは要するに屈辱と不聰明とに過ぎなかつた。下らない人間に頭を下げたといふことと下らない人間を親切有力な人間と思つたといふこととに伴ふ悲哀悔恨のみである。この八年間を迫懐すると悲哀や悔恨がかなりに多い。併し、この悲哀と悔恨程不快感の伴ふものはない。

私は永い間一個の稻毛詛風で通して來た。世間は私が何等の肩書もないことを知りながら私に對して少からざる好意を表して呉れた。この後私がどれ程立派な肩書を獲たとて私自身の本質的價值には何ものをも加へないのである。私は慙ひな肩書が附くよりも、寧ろ何時までも一人の「鎮西八郎」でよい、一人の「無冠の太夫」でよい。私の望むものは肩書ではなくて自分の使命天職を果し自分の力量を發揮増大

するに適當な場所と機關とである。私がこれまで先輩や恩師などに對して要求したものは畢竟するにこの活動の場所と機關とである。これを彼等が與へないのである。——今後の私は自分の天職と力量とに恰適した活動の場所と機關とを自分の手で造る他には道がない。

これを別な方面から考へて見るに、他人の下で働かうと思つたのは本來私の考へ違ひであつた。それは私の性格と矛盾することだからである。私は他人に働かされるよりも自ら自由に働くことが好きであるばかりでなく事實多くの仕事が出来るのである。私は本來働らくことが嫌ひな男ではない。只人の下で働くことが不得手である。他人のこしらへた規程や何かに従つて働くことが不得手なのである。私にとつては如何なる勞働も創造的のものでなくてはならないからである。如

何なる勞働も私に幸福——快感を與へるものでなくてはならないからである。仕事其のものに意義を感じずるものでなくては全力を以て當ることが出来ないからである。私が現に幾多の困難を排し經濟上の損失をも意とせず小雑誌の獨立經營をしてゐるのもこれがためである。

□

八年の日子は長くして短く短くして長かつた。この間、幾多の蹉跎失敗もあり幾多の轆轤不遇にも遭遇し幾多の屈辱羞恥をも蒙りはしたが、私は必ずしも失望悲觀はしない。勿論、理想的見地から見れば私の生活には非難に價する點は極めて多いが、兎に角私には少くとも自分の境遇に即して最善を盡さうとする意志だけは如何なる時に於ても蝕まずに嚴乎として存在してゐたからである。そして恐らくこの意志

は私の生命のあるかぎり絶滅しないであらう。否、私は、將來に於ては益々この意志——創造の意志を助長すると共に自分の境遇をこの意志に適するやうに改造することによつて出来るだけ蹉跎や失敗の度を減じ、斯くして、一方では、自分の人格を出来るだけ獨自なそして出来るだけ卓越したものとし、他方では、出来るだけ獨自なそして出来るだけ卓越した業績を擧げようと思ふ。

もとより私はどれだけの人間になりどれだけの仕事が出来るか、私否世界の何人も知ることが出来ないであらう。併し、人間一人の力は、それが凡庸以上のものであるかぎり決して輕蔑すべきものではない。眇たる私と雖も、眞に自己の長所強點を動力として全自我を白熱させ、後半世を擧げて自己使命の貫徹に捧げたならば、必ずしも無爲

には終らぬであらう。

生をこの世に享けたかぎり出来るだけこの生を信愛しなくてはならない。ああ永劫に只一度の人生！ああ全宇宙に只一人の自己！私は無限にこのかけがへのない人生と自己とを愛惜するものであると共にこのかけがへのない人生と自己とを出来るだけ価値あるものにしたと思ふものである。的は定められた。矢は弦をはなれた。私は的に向ひ全身を高鳴らして驀直に前進する外はない。一筋の矢の力が果して見事に彼方の金的を打ち貫くや否や。「時」はやがてこの間に對して明白な解答を與へるであらう。

一人の力終

大正九年八月十八日印刷

一人の力

大正九年八月廿一日發行

金壹圓五拾錢

著者 稻毛 詛風

發行者 東京市神田區表神保町七番地 阪本 眞三

印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 青柳 十郎

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社 秀英舎第一工場

許復製



發行所

東京市神田區表神保町七番地
振替貯金口座東京八七貳番

大同館

○稻毛詛風氏新著○
四六判最上製
美本全壹册
金貳圓參拾錢

文化と自然

感想論文集

送料金
十二錢

人本主義文化主義の現代に於て吾々の興味が偏に人生と文化とに傾くのは極めて當然のことである。併しながら人生と文化とは直ちに實在ではない、而も人間の生活は大實在と合一した時にのみ始めて眞に永遠的普遍的のものとなるてはないか。本書は斯くの如き見地に立つ著者が文化と自然とに對する觀察と批判と感想とを披瀝したものである。人生を創造と見自然を神秘と觀する著者の透徹した文化觀自然觀は必ずや眞生活の追求者に對し新緑の朝の如き清新にして力強き印象を與へるであらう。

内容目次一斑

- 第一編 人生：創造の位の人生觀、國民思想の將來、民本主義の精神、國民生活の改造と民本主義、生活態度としての個人主義、自我の正視、深く考へよ、求むる心と與ふる心、詩を求めよ、労働を樂しむ心、愛と責任、愛と聰明、第二編 藝術：文藝の價値を高めよ、自然主義より人生主義へ、第三編 自然：神秘の藏庫としての自然、雪の木崎湖、廣田紀行、關西紀行、若草は萌入初めた、夏の思出、秋

■新井白石先生著述■

（文部省選定の書）

讀史餘論

四六判最上製美本
全壹册紙數三百頁
正價金貳圓
送料十錢

東京日々新聞評、江戸時代流第一名家たる新井白石の讀史餘論は流石に犀照の見識を備へて我國史論の最も上乘なるもの頼山陽の日本外史の如き其論文は白石の論旨に負ふ所多し斯くの如き名著の近頃割合に行はれざりしは極めて遺憾なりしが本書出でし其缺陷を

校訂嚴密異本を参照
せしは本書の一大特色

好評五版

満たすに足れり。單に専門史家のみならず世の識者經世家其他當今の時勢に志あるの士は本書によりて啓發せらるゝ所尠少ならざるべし。内外教育評論：白石の讀史餘論の價値は今更論ずるの要なし本書は主として白石の外孫藤清盈の寫本に據り其他諸種の異本を涉獵して其の缺を補ひたるものなり從來世に現れたる者の中に最も信頼するに足るべし。原本の評語註語、外新に校訂者が補語を附し以て異説を擧げ且つ註釋を施して研究者の便を計れる勞は多とすべし。且つ一々讀み假名をつけ巻末に索引を添へたり。

□東京帝國大學文學部助教授 植松安氏新著
好評 三版 古事記新釋

四六判最上製美本
美本五百頁
正價金貳圓五拾錢
送料十 二 錢

難解なる古文を最も平易なる假名交り文に書き下し振假名を附し詳細なる語義と其索引を添ふ。著者が國民心理を基礎として神代と上古との風俗人情に下したる評論的文章は各段章に顯れて大和民族發展の由來を明にし國民歸嚮の中心を説く是れ本書の特長なり。今や大戰終局して世界思想の急激なる變動は將に我國國民思想に及ばんとす、世界の日本、東洋の日本、我等の日本之れをこの書に得よ。

■東京帝國大學文學部助教授 植松安氏新著 (上卷)

新刊 發賣 假名の日本書紀

四六判最上製美本
全壹册六百五拾頁
正價金參圓五拾錢
送料十 二 錢

日本書紀の一體に假名日本書紀といふものゝ在する事は從來一部の學者に知られて居たが未だ普く其存在を知る人が少い。本書は著者が出來得る丈の手を盡して調べ得た廿餘部の異本を参照して著述したものである内容は本文を漢字交りに書き下し漢字に假名を附し假名に漢字を當て一段毎に簡明なる詳解を加へ索引として辨すべき詳細なる目錄を添ふ。正確なる國史を最も平易に讀み得る書である。

□一條忠衛氏新著 □ (二卷各姉妹篇なり)
好評 三版 男女道德論

四六判最上製美本
全壹册五百餘頁
金貳圓五拾錢
送料十 二 錢

好評 四版 男女問題講話

四六判最上製美本
全壹册五百餘頁
金貳圓五拾錢
送料十 二 錢

人生の歴史は男女の歴史である一切事件は男女を背景としてゐる。父母といひ、夫婦といひ、兄妹といふも、皆男女の關係ならざるはない。然るに男女の根本研究、殊にその倫理的關係——殊に現代の新生活を立脚地として新道德上より男女問題を論究したるもの甚だ少なきは寧ろ吾人の怪訝に堪えぬ所である。一條忠衛君の本書はこの興味ある問題を捕へて、從横自由に之を分析解剖し高遠なる理想に照して之を批判す。或は卑近なる實例を採り或は社會の暗黒面を抉發し現代人心を警醒し指導せんとするの精神至る處に溢るゝの觀がある。現代青年男女の良參考書たるのみならず。教育學者倫理學者はまた父兄たるものは一讀して利益を受くる所多かるべきを疑はない。一條君は篤學の士である本書二卷は多年研究の結晶である。同君を江湖に紹介するは吾人の光榮とする所である。早稻田大學教授内ヶ崎作三郎識

男女問題を解決する一大光明現はる

■稻毛詛風氏新著■(代表的思想問題を明快精細に論究す)

第貳版 思想の力

四六前最上製美本
全壹册約六百餘頁
金貳圓八拾錢
送料十二錢

思想は力也。生活の精髓にして文化の中核なり。宣哉、生活革新世界改造の今日思想の價値の力説と思想問題の重視とを見るなり。本書は著者独自の理想主義的見地より思想の意義と價値とを徹底的に鮮明し代表的思想問題を明快精細に論究せる者。混沌たる我國民思想は本書に依りて始めて眞相を闡明せらるゝと共に將來の標的を見出すや必せり。學者・政治家・教育家・文學者・宗教家等の思想家は勿論敢て心ある一般國民の清鑒を要望する所以なり。

■稻毛詛風氏新著■

四六判最上製美本全壹册

好評
六版

教育者のための哲學

正價金貳圓
送料十二錢

凡そ教育者に高大なる理想と確乎たる信念とを與ふるものは哲學也。然るに遺憾なる哉我が國の哲學者教育者にしてこの點に努力する者皆無に近し。幸に多年哲學と教育學とを兼修し『教育哲學』の建設を以て一大使命とする著者はこの現狀を痛歎するの餘り本書を公にして(一)哲學が特に教育者に必要なる所以と(二)教育者に必要なる哲學の概念と(三)教育哲學の意義及價値とを的確精細に闡明することに依りて上記の缺陷を根本的に匡救せんとす、教育者としての光と力とを獲んとする士は來れ。

■醫學博士羽太銳治氏新著■

四六判最上製美本全壹册
金貳圓五拾錢
送料十二錢

第七版 性慾教育の研究

▲内容目次の一斑▼

第一章 少年に性的知識の開發を必要とする理由

數百年の習慣：性的生活を包める無智の幕：當時の社會狀態：文明に伴ふ惡弊：獨逸の花柳病豫防會議：花柳病に關する知識の缺乏：性慾教育の缺陷：生理的自然現象としての性慾：性慾教育に對する反抗の傾向：誤れる道德觀念：賣笑婦の起源：少年時代の人間に示すべき事：春機發動期に於ける性の慾發達

第二章 性慾教育の當事者

學生の生活方面：兩親推薦にすべき材料

第三章 性慾教育の範圍其方法

私的性慾最育の施設：性慾的教訓の意義：家庭の少年に對する重大なる義務：少年が兩親を信せざる一因及之れより生ずる弊害：裸體畫像に對する教育の誤謬：裸體の隱蔽と性慾の刺戟：小兒に裸體を見慣れしむるの利益：妹は如何にして生れたるか：性的教育案内：魚卵の受精：受胎現象の説明：家庭の性慾教育に注意すべき點

第四章 學校に於ける今日迄の性慾教育

我國性慾教育の現狀：遊戲と性慾抑制：啓發の結果は如何：教師に對する性慾

教育の各國に於ける狀況……學生と性慾教育……意志力の減退

第二編

第一章 兩性に分かるゝ原因

兩性の原因に關する説の濫觴……性因に關する迷信俗説……發生學上の説……醫學上の説……統計學上の説……科學上の説

第二章 性的機關と性慾

性的器官と性慾の關係……男子の生殖器機能……陰莖……精子……受孕現象……勃起ける勃起 射精に伴ふ勃起……變態性慾に於ける女子生殖器機能……處女膜……月經……快美感覺の男女比較……無精液

第三章 生殖器の構造及異常

男子生殖器……辜丸……陰囊……陰莖……遺精……無精……早漏……女子生殖器……子宮腔の構造……陰核其他

第四章

花柳病解説 兒童の性的生活及其研究に關する歴史

兒童期の區分……法春機發動期……同性愛

を爲す女の少女時代……辜丸抉出……ルソウ氏のエミール……教育家の努力……心理學人類學方面よりの觀察……騎士の古典……賣淫に關する著書……變態性慾の研究者

第六章 兒童の性的特質

痒癢と自續……兒童の勃起……病理的刺戟自續の起源……誘惑に依る……精液の成分及發生……精子發射の最も早き時期……生殖能力の境界の交接能力の境界……快美感覺の性質……接觸作用の意義……無差別時期及同性愛文藝上に現はれたる性慾……兩親に愛着する兒童……兒童の愛する女の性愛の消滅……性慾的理解の缺乏

第七章 性的現象

性慾の早熟と晩成……病的性……變態性慾の原因……同衾慾……病理學の範圍に屬すべきもの……男兒に於ける早期の發達……早熟の原因……モール氏の研究……先天的同性間性慾……性的女兒……友情と性慾の區別……陰部露出病……双生の性慾

原作は妙趣盡きざる世界的名著

四六判最上製約七百頁 金參圓五拾錢 送料十錢

近松世話淨瑠璃集成

第三版

小林榮子校訂

本書は近松の靈筆に成たる世話淨瑠璃の全部廿四編を拵めて現代にも容易く其妙趣を味はしむべく難解の俗語佛典の成語には特に妥當なる漢字を充てたる校訂者の苦心によりて千古の才人の絢爛たる筆致は更に幾段の光彩を發揮して讀者の眼前に展開せらるべし。序論亦的確にして近松をして地下に領かしむるものあらん近松の作を多く讀たる人も讀め初めて近松の作に接せんとする人も讀め

内容目次

長町女腹切 淀鯉出世瀧徳 曾根崎心中 源吾兵衛 薩摩歌 小中重井筒

心中二枚繪草紙 戀八卦柱曆 堀川波の鼓 與兵衛 卯月の紅葉 小中 卯月の潤色 伊達染手綱 小中一萬年草

夏 平年忌歌念佛 今宮心中 心中又は氷の朔日 夕霧阿波の鳴渡 忠兵衛 冥土の飛脚 嘉平治 生玉心中 鎗の權三重帷子

山崎與次兵衛壽門松 博多小女郎浪枕 心中天の綱島 女殺油地獄 心中宵庚申 心中二ツ腹帶

■三浦修吾氏新著■ (大好評を博して注文殺到)

最新刊 隨筆 林檎の味

四六判 洋裝美本
全壹册 箱入三百頁
正價壹圓八拾錢

著者が最も自信あ
る感想文集出來

【内容目次】林檎の味：土：最大抵抗に向て：人傑々
批評と理解：月と兎：かさなる不運：大きな石の頭
の味：眞理：新しき力：襖：教壇上で柏餅：敵：砂糖

ひ：白鷺：愛の眠 御初獲：二度目の死：月光：秋の風：武蔵野の一角に立ちて：蘇鐵：敵：私の願
母：鳴濱村：瀧山十太夫翁：靜岡行：田沼行：白河行：入峽：野の一角に立ちて：蘇鐵：敵：私の願
三浦半島と九十九里濱：松江：旅の土包：武州松山 古鐘：豚：兒童心身の鍛鍊：箱根行：
信州へ：鐵の蓋：蟲の音

三浦修吾氏著 ■ 四六判 最上製美本全壹册 正價金貳圓 送料十二錢

好評 三版 教育者の思想と生活

著者は教育者として十幾年の苦しい生涯を送つて來た。内體にも性格にも智識にも多くの
缺點を有つてゐた著者は、導かれる方へ進まん爲め眞摯に考へ純粹に感じ強く實行せんと
して幾多の障礙に出會つた。躓き乍血を流し乍猶光明に向て進まんとして細いかすれた聲
を出して叫び續けて來た。其聲か此書となつたのである思想の上に實驗の上に家庭生活の上
上にどれ丈著者が苦悶して來たか其事が何事かの暗示を有つものであり得たり。著者の幸
は之に過ぎない。

吉田絃一郎氏著 ■ 四六判 最上製 正價金壹圓八拾錢 郵稅十二錢

好評 三版 生の悲劇

過去を知らず、未來を知らずたゞ現實の靈と現實の肉とのみ彼れの生命の凡てを燃焼せ
しむることを允されたものにとりてはそれが暗であらうと悲哀であらうとたゞ現實を貪
り現實を懐しみ現實を慈しむ心の他には何の希望もあり得ない。人間に與へられた運命
が暗い淋しいものであるとしても自分はその呪はない。それが自分の生に對して與へら
れたる唯一のものであることを想ふ時に私は一層その不具なる人類の運命を感はずには居
られない。(著者)

吉田絃一郎氏著 ■ 四六判 最上製 正價金壹圓五拾錢 送料十二錢

好評 七版 創作集 島の秋

私は冷たい理智や、批判や、狭いイデムの上から人生を取り扱はないで、できるならば嬰
兒のやうな謙虚な心で、この幽玄な人生の底深くはいつて行つて見たいと思ふ。私は解剖
刀を持つ科學者の眼で人生を見ないで、直觀の境に於いて自然と融合する詩人の心を持つ
て人生を見たい。この心から出發して靜觀した私の人生は、いつも死と悲哀と流の相を
背景として刹那より無限に暗い一路を辿つてゐるものであつた。私はこの觀照の底に映つ
た心影を、さながらに私の貧しい收穫の中に取り容れやうと試みた。(著者)

東京帝國大學文科助教授
東京高等師範學校教授

宇野哲人先生新著

四書講義 中庸

菊判最上裝
正價金貳圓
送料十二錢

新刊
發賣

儒教の目的は大學を備はり儒教の根本義は中庸に明かである。かくて學庸の二書は經となり緯となり互に相待つて儒教の真相を傳ふ。著者は如上の見解を以て先に大學講義を著し今亦中庸講義を成す、大學に由て既に儒教の目的を明かにせる大方の士は更に中庸に就いて儒教哲理の眞面目を了せよ。尙附錄數編は皆直接間接に中庸の意義を明かにする者なり。

日蓮宗大學講師
『法華』編輯主幹

文學士 小林一郎先生著

日蓮主義日訓

菊 半 截 本
全壹册四百頁
正價壹圓貳拾錢
郵 稅 八 錢

好評
三版

忙しき世に立つ人は靜なる心をもつことを必要とす。忙しき人は決して修養を忘るべからず。本書は法華 修養上に最も適切なる金言三百六十六を選出し之を毎日に配し之に簡單にして明快なる解釋を加へたるものなり。何人も毎朝其の業に取掛る前に本書を開けば愉快にして力強き心を以て其日の業に當るを得べし。本書は實に此の忙しき世に立つ凡ての人の師友なり。

東京帝國大學文科助教授
東京高等師範學校教授
文學士 宇野哲人先生新著

四書講義 大學

菊判最上裝
正價金壹圓八拾錢
送料十二錢

大學は儒教の目的を善く組織的に叙述せるものなりとは著者の創唱する所。此書は如上の見解によりて平易明晰に講述せるものにして冠するに大學宗旨を以てし且つ附するに索引及之と密接の關係ある幾多有益の研究を以てす。苟も儒教の何物たるかを知らんと欲せば必ず此書を繙きて著者の圓熟せる講話を開かざるべからず。敢て識者の一讀を希ふ。

目次

序論……大學の意義……大學の著者……大學の表章……大學章句……三綱領
八條目……致知格物……誠意……正心……絮矩の道……衍義と衍義補……大學章句序……大學……經一章……傳十章……儒教の目的に就て……唐堯の政治……儒教と支那の家族制度……朱陸二子の異同……王陽明と朱陸二子との關係……十三經總題……大學索引

以下續刊

四書講義 中庸	菊判最上裝
四書講義 論語	菊判最上裝
四書講義 孟子	菊判最上裝
四書講義 子	菊判最上裝

■早稻田大學講師 吉田絃二郎氏著■

好評
七版

生命の徵光

四六判最上製美本全一冊 正價金貳圓 送料十二錢

「力は孤獨から生れる」この人生の見方は非常に淋しい。けれども涙ぐまないほど懐しい生活の力を私に與へた。兄弟を捨て友を捨てあらゆる人々を捨て、我れたゞ一人、人生の悠久な寂寞と運命の廣野に孤獨の影を見出した時私たちの哲人生活の第一歩が始まるのであるまいか。光りなき絶望の底から光りが生れ、愛なき嫉妬者の臆病な心の底から温かい人間愛が生れるのであるまいか私はこの心弱い生活者の收穫の中から創作五篇と卅餘篇の感想を纏めることにした暗の底に低徊せる孤獨者のいのちの微光をもとむるかすかな祈りの聲として——〔著者〕

〔著者が自信ある創作文集〕

■文學士 今井政吉先生新著■ (正價金貳圓五拾錢 郵稅八錢)

露西亞文明記

四六判最上製 全一冊五百頁 寫眞版十四個

好評
再版

突如として起れる革命の爲、世界の視聽は期せずして露國に集り其後國情亂麻の如く紛糾するに及び收拾果して如何は何人にも興味多き問題となれり、斯くて世界の思潮を語り文化を談ずる者先づ露國々情を審にする要あらんとす、この際著者は多年研究の結果を傾倒して本書を公にせらるる内容は單純なる感想や片々たる觀察を集めたるものにあらずして滯露四年の生活に基き露國の社會生活の真相を叙述し併せて露國文明の眞情を説明せるもの時代の要求に生れし此新書は必ずや江湖讀書子の歡迎を受くべし。

内容目次

大國ロシア：シベリヤ觀：舊都モスクワ：市街の一斑：都會生活の狀態
：一陽來復の季節：夏の別荘生活：娛樂機關：家寶サモワール：宗教
の力：強烈なる大酒：ニチエボー主義：陰鬱なる冬籠：降誕祭：復活
祭：都會と田舎：ワルシヤワとキエフ：オデッサ：露國の首府：白夜
の光景：権力萬能の政治：幅の利く官吏：悲惨なる農民：芬蘭公國：
バルチック海と北氷洋：露國の農業・工業・商業：露國の富力：國民の教育
機關：露國の婦人：國民性：露國の戰爭氣分：露國の文明

東京帝國大學文科助教授 宇野哲人先生新著
東京高等師範學校教授

支那哲學史講話

（菊判最上製美本 正價金貳圓五拾錢 郵税金十二錢）

本書は上古より清末に至る迄の支那思想の主要を極めて平易簡明に叙述して最もよく要領を盡くせるものなり。特に清朝に於ける學術思想の變遷が如何に暗々裏に革命を惹起するに至りしか支那の新人の思想は如何なる傾向を帶ふるかは著者の最も留意せし所にして從來世に行はれたる支那哲學史の缺陷は本書に依つて補足せられて亦遺憾なし、本書は又附録として一々原文を掲げて直ちに堂奥を窺ふの便に供し亦著者の議論の根據あるを知らしむ。要するに初學者にも専門家にも座右に缺くべからざる絶好の新著なり。

第九版

野村隈畔先生新著 ■（心血を瀝いて成りし近來の名著）

現代文化の哲學

四六判上製 正價金貳圓貳拾錢 送料二十錢

好評再版

本書は著者が現代の思想界に憧憬して自我の絶頂を踏破しそこに熾烈なる純粹自己の求に魅せられて現代文化の中に自由なる生命の象徴を得ようといつとめ、時代の要として全篇に溢れ現代文化の真相を根本的に解説し、神祕なる思想・澁澁たる生氣は躍如容は大體文化の根本方向としての自由・現代政治批判・現代教育批判・現代宗教批判の四篇に分ちそれ／＼細網を設けて詳論してある青年思想家として名ある著者の論議は慥に一讀に價するものあり。——（東亞の光評）

文學博士波多野精一序野村隈畔新著 ■（正價金五拾錢 送料十二錢）
文學士内ヶ崎作三郎

ベルクソンと現代思潮

菊判最上製 全壹冊箱入

好評四版

本書は専らベルクソンの思想を中心として現代の哲學及生活の梗概を述べたものであるだけに獨りベルクソンの特色と價值とを學び得るのみならず廣く哲學的思想を解する上に於ても亦尠なからざる價值がある我々は此書を廣く江湖に薦めることに躊躇しない。……新人評……

東京青山學院教授 井原 儀先生新著

好評 再版 地學地熱の作用

菊判最上製美本
全一册
正價金貳圓五拾錢
送料十二錢

本書の内容を東京朝日新聞評して曰く——第一編には太陽系の略説、星霧説の要旨より地球内部の状態を概論し第二編には海陸の成生、地盤の昇降より進んで火山に關する詳論に入り更に噴氣孔並に温泉、間歇泉及び地震に關する仔細の説明に及ぶ由來地震國にして温泉國たる本邦に於て地熱學の研究の如き最も學者の興味を惹くべきものにして却て左したる注意を促さず地熱に關する著書の未だ全く世に出づるものなかりしは寧ろ不思議といふべし。本書の出でたる斯學上の知識普及に關して最も力あるべきことは疑を容れず又また口語體にして頗る解し易し。

目 次

- 地熱概論——太陽系——地球の成因——地球内部の状態——地熱の作用——
- 海陸の成生——地盤の昇降——火山——火山の活動——噴氣孔——温泉——
- 地震學——地震の原因——地震の種類——地震の波——地震の影響——
- 地震の前兆と天體との關係——各小細目は略す。

第五高等學校教授 文學士 西澤富則先生著

歐洲文藝界の逸話

四六判最上製
四百五拾頁
正價
金壹圓貳拾錢
郵稅金八錢

好評 激甚 内容目次一斑

(日本及日本人評) 文章は平易に面白く叙述し有れば讀みて趣味を感ずると共に人格の修養に資すべき記事多く一讀興味を感ずること少しとせず

國王と詩人
奇拔な贈物
暴君の結婚觀
ゲエデの元且
最後の接吻
三ッの皮肉
ハイネの一枚
たつたの皮肉
頭迷な檢閱官
閨秀作家の奇智
厚顔な文學者

ルツソオの失戀
ヘッペルの頓智
豐富なる想像
詩人の陰徳
ソッブと讚
吞氣極まる詩人
唯一の慰藉
亂暴な祝餅
奇妙な貯金箱
節儉な詩人の妻
ゲエデとお三どん

批評家の苦衷
適切な引例
魔格な自殺
嚴格な禁止
興行の喜び
モデルの眼識
下女の眼識
生臭坊主の結婚
不釣合な結婚
侯爵夫人の虛榮心
同日の誕生

死神の猶豫
長命な文士
犬から男へ
女からの門出
最後の門出
人を馬鹿にした挨拶
ルツソオ犬に囀る
ボオオの負惜み
ユウゴオの負惜み
責任解除
失敗せる決闘

東京帝國大學 文學博士姉崎正治 文學士鈴木宗忠共譯
文科大學教授

信教の自由と學問の獨立

現代思想界

必讀の名著

▽菊判最上製美本全壹冊正價金壹圓貳拾錢郵稅八錢
現代は實に精神的な自由文化の建設時代である歐洲人は現時の悲
慘なる世界大戰の壓迫の下に益々この要求と憧憬とを強化しつゝ
あることは事實である而して眞の文化は言ふまでもなく各個人の
精神的自由を遺憾なく發揮するものであるが政策上より外部的に見るときは如何ほど迄信
教の自由と學問の獨立とが實現せらるゝかによつてその文化の程度を判斷することが出來
る是において宗教と政治と教育との關係と云ふことが國家及文化に於ける重要な問題で
ある本書は即ちこの問題を捉へて政策上歴史上及思想上から精密に論及したものの現代の文
化要求に對して新しい指導と敬虔なる信念とを與ふることを疑はない。されば本書は現代
の生活乃至思想界に最も價値ある良書なれば一般讀書家は勿論政治家教育家宗教家の是非
一讀すべきものなり

788
739

終

